

# 妹背山婦女庭訓

## 初段

### 小松原の段

春日野の社頭に近き小松原、時雨晴れ間の狩り戻り大判事が嫡子久我之助清舟、美男とも沙汰に聞こえし角前髪、それとは見せぬ蓑笠に、振り担げたる吹矢筒、詣で休みの捨床几、『これ幸ひ』と腰打ち掛け、疲れを休むるその折から  
本社の方より下向の一群れ、派手を揃へる風俗の中に際立つ武家育ち、年は二八かそれぞとも、振りの袖のみ濔標、ゆたのたゆたの衣被き、腰元数多引き連れて、打ち過ぎながら振り返り  
見合はす顔も  
清舟と互ひに月よ

折から社の境内より蝦夷子が家来宮越玄蕃、槍挟箱殿めしく代参の戻りがけ、この場の体を見るや否、供を制して挟箱、腰打ち掛けて窺ひある  
かくとも知らず腰元小菊

「コレ申し前髪のお侍様、私が方の御寮人様、申した  
い事があれど、恥しうござりますげな。幸ひなこの吹矢筒、話に聞いた囁き竹、どうぞ聞いてあげまして」  
と耳と口とへ当てがうて

「かうこの中を私が持ち、取りも直さず媒人役」  
可愛らし事通じ合ひ、互ひに嬉しき恥ぢ紅葉  
玄蕃主従夢現

腰元共は氣を利かし、二人を床几へ押し遣れば  
扇を開き寄り添うて、口と  
口とを鴛鴦の、ひつたり抱き付く  
こなたには、ぐわつたりどつさり挟箱、こけ落つるやら  
槍持ちは、槍をこかして立ち騒ぐ  
宮越玄蕃起き上つて砂打ち払ひ

「ヤア久我之助殿、余程に味やらるゝ。ヤそこな相手は、過ぎつる頃相果てし太宰の娘。コリヤ興がるは、コリヤよい所へ出くはした」  
と聞いて二人は又びつくり

花の香の、零るゝ愛につゝくりと、思ひに悩む立ち姿  
機転利かして腰元共

「コレ桔梗殿、今日はマア余程の道。お上にもさぞお草臥れ。こちらの床几で一休み」

「オ、小菊殿、よう気が付いた」

とうなづき合うて隣の床几、小腰を屈め会釈して

「イヤ申し、あなた様に御無心がござります。こちらの御寮人の申されますは、お前様の持つてござるその遠眼鏡の様なもの、暫しが間お貸しなされて下さりませ」  
と言ひ掛けられて

「これはく易い事。これは小鳥狩りを致す吹矢筒と申す物」

「ムウ、そうしたらこれがアノ吹矢筒でござりますか。申しく御寮人様、これをマアご覧じませ。雛鳥でも大鳥でも、アレあなたの吹矢を持つて、くつしやりと射なさるのぢや。マアこの筒をちよつと握つてご覧じませ。マどの様な所へでも心よう届きさうな、ム、長い物でござります」

とおどけ交じりの恋の橋

岩木にあらぬ清舟も、につこり笑顔相惚れに、下行く水の零れ口

「ムウ、さては太宰殿の息女なるか」

「お前は大判事様の御子息久我之助様か」

「ホ、ウ、過ぎ行かれしそなたの父太宰少弐とわが父とは、故あつて遺恨ある家。その息女とは夢にも知らず只今の為体」

「そんならお前に添ふ事はなりませんか。ハア、」

『ハツ』とばかりに早や涙

宮越は聞き咎め

「ムウ、スリヤ兩人は早やちえくくつたよな」

「ア、イヤコレ、必ず僮相言はれな。遺恨ある家とも知らず、最前の時雨の内、同じ床几に雨宿り」

「成程、今の雨宿り。それならそれにして置かうが、一体この雛鳥には某が大執心。それ故宿の妻に申し受けんとかねて主人へ願ひ置く。ハテ今迄の事はたとへ如何様な事あらうと儘よさ。この後心に随へばそこはぐつと了簡する」

「これはマアきつい粹様、私は雛鳥の召使ひ小菊と申す者でござんす。この方の御寮人を嫁にせうとは、ホ、笑止」

と打ち笑へば  
玄蕃睨め付け

「ヤイ／＼女め、その過言覚えておれ。これからすぐに御所へ馳せ行き、二人の様子を触れ廻り、どいつもこいつも身の上」

と駆け出だすを  
腰元共、袖に縫つて

「ア、コレ申し、今の様に言ふたのはお前様のお心を引いてみる謀。オ、正直なお方ではあるわいな」

「ム、スリヤ身が言ふ様に取り持つか。サアお娘が真実応と言ふか。ソレ最前ちらと見ておいた吹矢筒の囁き竹で聞きたい／＼」

「さつても目早いお方ではあるぞ。お望みの通り囁き竹で御返事を聞かませう。サア／＼耳へお当てなされ」

『オツ』と心得吹矢筒、耳に押し当て居合腰

小菊は心得あり合ふ吹矢、筒へ差し込み口押し当て、ふつと吹けば

宮越が耳へぐつさり

「アイタ／＼／＼。エ、こりやどうしおる」  
と狼狽へる

その間に雛鳥打ち連れ立ち、館へこそは逃げ帰る  
玄蕃は吹矢抜き取つて

「堪忍ならず」

と追ひ駆くるを

久我之助押し留め

「ア、コレ／＼、たかゞ女の戯れ事。かれこれ言ふ程かへつて恥辱」

と宥むるこなたの

咄道より、数多の侍走り着き

「清舟殿これにごさるか。先刻采女の局様、禁廷の御殿を脱け出でいづくともなく行方知れず。貴殿事は采女様の傳き役、早や／＼お知らせ申する」

と聞いて驚く久我之助

こなたの玄蕃聞き咎め

「ホ、聞き捨てならぬ采女の出奔、蝦夷子公へ注進せん」

と玄蕃諸共数多の侍、出口の方へ急ぎ行く

後に清舟只一人

「ハテ心得ず」

と一思案

向かうより来る人音に、身を除けてやり過ごせば  
さもやごとなき内裏上臈、心も空に歩み行く  
袖を控へて

「采女様でござりますか」

「ヤア、久我之助か」

「ハ、ア、只今組下の注進あつて、采女様には御殿を脱け出で御行方知れずと申すが、いかなる御所存あつての事」

問はれて辛き物語

「そなたも聞き及ばれん。蘇我蝦夷子威勢に誇り、わが娘橘姫を后に立てんと兼ての望み。妾は君に思はれ参らせ、夜の御殿昼の亭、暫しもお傍を離れぬ猜み。父鎌足様を讒言して大内を遠ざけ、何方にお渡りあるともこの身さへ露知らず。それ故父の隠れ家を尋ね求め身を隠し、姿を変へる身の望み。たゞ見通しに頼むぞ」

と後は涙にくれ給ふ

「ハ、この身は傳きの役目なれど、後日の難儀少しも厭はず。御身の為、又第一は天子の御為。成程落し参らせん。が諸士共方々手配り致せば、村口を御供申し欺つてお通し申さん。まづ／＼これをお召しあれ」

こなたは憂き身隠れ蓑、笠に涙の天が下

清き心の清舟も、共に時雨れて

### 蝦夷子館の段

行く空は

九重の榮に隣はる一構へ、三条の御所と持て囃す蘇我蝦夷子が広館、雪見の亭を設けの座、冷たさ堪え主命の重き役目と宮越玄蕃

後に荒巻弥藤次が、台に乗せたる雪人形、各々機嫌を伺ひける

「大判事の子息清舟、召しに応じて参上」

と呼ばる声に入り来たる

久我之助清舟、器量骨柄武気備はる、中に優美の長袴礼儀正しく座に着けば

蝦夷子大臣進み寄り

「ヤア珍しき久我之助、使ひを立てしに早速の到来、尋ねたき事別儀でなし。帝愛憐を掛け給ふ采女の局は鎌足が娘。この頃内裏を脱け出で入水せしと聞きつるがその方は采女が付人、噂の通り違ひはないか」

「仰せの通り、采女殿には猿沢池へ入水ありしが、われ傳きの役目なれば野辺の送り営み参らせ、未だ三日を過ごさず」

と詳かに答ふれば

「さこそく。親鎌足が蟄居を悲しみ、浅ましい采女が成り行き。その方付人の落度となり、親大判事に勘当を受けたと聞く。さあれば主も親もなき身。それに何ぞや、厳めしく礼服を着飾つてわが目通りへ出でたるは、心得難き汝が心底」

「ハ、ア、御不審の段御尤も。親もなく主君もなく独り立ちの私、若輩ながら蝦夷子公へ奉公の儀願ひ上げたく、君と敬ふこの礼服」

と心に探りの一思案、誠にやかに相述べれば

「ホ、さてはこの蝦夷子を頼み奉公の望みとや。ムウわれも望む所なれど、その方が父大判事に、汝めが勘当赦させて、親子共臣下となさん」

「こは仰せとも存ぜず。親大判事が氣質として勘当も許さず、元より二君に仕へぬ所存」

「ムウその口剛き大判事、蝦夷子が幕下に付けて見せよう」

「ホ、ウお手柄に如何様とも、親清澄得心致さばその上もなき幸せ。所詮私一人の奉公が相叶はずば、とやかう申して益なき事。まづお暇」

と礼儀をなし、広庭に降り立つて、しづく歩む向うの

一間の襖押し開けて、入鹿大臣が奥方めどの方

「御機嫌いかが」

と両手を付き

「御酒宴の半ばながら、あなた様へお願ひ。夫人鹿大臣には、秋の頃よりひたすらに仏の道に入り給ひ、奥の亭へ引き籠り、一つの棺を地中に納め、丁度今日が百日目。入相の鐘を限りに、定に入り給ふと聞く。

何に譬へんこの身の悲しさ」

涙先立つ託ち事

「ヤア聞きたくもない入鹿めが沙汰。仏法といふ天竺外道の術に帰依し、この世にあつて益なき倅。土へなりと定へなりとも、入り次第にしておき召せ。これよりは居間を替へ再宴を催さん。玄蕃弥藤次も奥へ来よ」と怒りの風も風の梶

腰元共が取り取りに、一間へ伴ひ入りにけり

後見送つてめどの方、便り少なき身の上を、諦め兼ねし胸の内

それに引き換へ奥の間は、地下を写しの三味線に、艶めく歌の声冴えて

捨てた浮世にかうしてあれば

「エ、心ない、この中で雪見の酒宴どころかい。あの

方

「ソレ、ソレ」

と蝦夷子が下知につれ  
玄蕃弥藤次切り付くるを

身を沈めば

双方の、刃は相打ち

後へしさつて兩人が、又も切り込む刃と刃

庭の飛石「エイ、ウン」と、受くれば

御殿の天井より、怪しく下りる鉄網に

清舟きつと眼を配り

「ヤア何故に尾籠の手向ひ、蝦夷子公の仰せなるか」

「ホ、ウ不審は尤も。その方が武芸の試み」

「イヤモ驚き入つたお手際、見届けました」

と双方の刀は鞘に、飛石も元へ直せば

御殿の鉄網、棟木遙かに隠れけり

久我之助さあらぬ体

「ハテ難しい御要害、決して他言は仕らぬ。お氣遣ひ

御無用」

と暇申して久我之助、左右に目配り悠々と、表を差して立ち帰る

後に蝦夷子は溜息の

鐘の打ち納めが入鹿様の御臨終。夫を先立て何楽しみ、

われも一緒にこの雪と、共に未来の道連れ」

と上着を脱げば墨染の、今朝より積る広庭の雪に座を占め合掌し、この儘こゝに埋もれて死なんと誓ふ貞心は、天に通じて降りしきる、膝も袂も白妙に色香盛りの黒髪も八十路の姥と疑はる

恩愛血筋に屈託せぬ蝦夷子大臣一間を出で

「嫁めどの方、まだそこに泣いてゐるか。テ馬鹿者の

入鹿が事を苦に病み、物好きな雪なぶり。もう打ちやつてこゝへ来て、火に当りやれさ」

「アノ胴欲な仰り事。夫は定に入り給ふに、そもや

マア妻の身で、褥の上にならませうか。雪に凍えて死ぬるのが、せめてもの夫婦の誠」

「ハテ貞節な心底。その実心を聞いてお身に問ひたい事がある。倅入鹿が入定は仏法信仰ばかりであるまい。親子に勝る夫婦の仲、夫の心知つてみよう。サアその子細が聞きたい」

「イ、エ親御様さへ御存じない事、何の私を知つておませう。さりながら常に夫が申さるるは、内大臣鎌足と父蝦夷子は国に二つの柱同然。その大事の鎌足様を追ひ退けなされたは、威勢を妬み猜んでのさかしら事

と、世の人の讒りは耳に入鹿様、それが積もつてあのお覚悟。蝦夷子様のお心さへ改めて下されなば、入定も留まり給はん。嫁子不憫と思し召し、お聞き入れ下さりませ。お心が直らねばお前も遁れぬ危い命。君の御恩を受けながら、十善の位を奪ふ御謀叛の思し立ちでござりませうがな。天道様の御罰にて、お身に報ふが悲しさに妾が御異見。悪心を留まつてたべ蝦夷子様一

と舅を思ひ夫思ひ、合はす両手にはらくくと、涙深山の滝なせり

「ム、スリヤわが大望、残らず入鹿に聞いたよな。氣遣ひすな。そち達が望みの通りしてくれう。がまだ尋ぬる事がある。めどの方、駒下駄直せ」と刀引提げ、庭の面

「嫁、近う寄りや」

「ハイ、ハイ」

と立ち寄る目先へ氷の刃

『ハツ』と飛び退き

「ア、コレ申し舅御様、そんならどうでも思ひ留まるお心は、ござりませぬな」

「エ、馬鹿尽すな女め。一度万乗の位に昇るこの蝦夷

子、エ、不甲斐なき性根と知らず。入鹿に渡した連判状、おのれが在り所知つてゐよう」

「イエ、御謀叛の訳は聞いたれど、連判とやらは」  
「ヤアぬかすまい。一大事を聞いた女、殊に安倍行主が娘。所詮生けてはおかれぬ奴。言うても殺す、言はいでも殺す。サアその一卷こゝへ出だせば、苦痛せずに一思ひ。抗ふと鬻り殺し、サア、何と」と付け廻す

遁れ刀に肩先すつぱり、付け込む蝦夷子が鋭き切先

手負は大地に転けながら、手に渡さじと懐中の一卷火鉢に燃え立つ炎

折しも聞こゆる鐘大鼓

「ヤア訝しき攻め鼓、連判状を焼き捨てしは、大事を敵に洩らせしな。憎い女め、思ひ知れ」

とえぐりくるく流るゝ血汐

眼血走る表の方

「勅使なり」

と呼ぶゝる声

「ムウ、貝鐘の音に引き換へ勅使の案内はわが胸中、窺ひ探る謀。身体今日の一举に極まる、装束せん」と不敵の蝦夷子、帳台深く入りにけり

程もあらず入り来る勅使は、安倍中納言行主

副使の武官大判事清澄

威儀を正して座に着けば

出迎ふ主も衣服改め、上座に招じ頭を下げ

「勅使として行主殿、雪中の路次、別して御苦勞に存ずる」

と挨拶終れば

膝を寄せ

「今日の勅使世の常の沙汰にあらず。貴卿、逆心の徒を語らひ、帝位を掠めん企てありと叡聞に達せし故、この行主は一家の誼、進み出でて使ひを乞ひ受け、とりあへず馳せ向かふ。包まらず言上申されよ。サ抜き差しならぬ証拠あり」

と投げやる一卷追取つて

見れば覚えの連判状

さしもの蝦夷子も証跡に

『ハ、ハ』とばかり驚く面色

「何と見られしか蝦夷子殿、わが賀の入鹿大臣、この一卷を帝へ捧げ、諫めても承引なき父が逆心。子としてこれを頭はず事、不孝の罪莫大なれども、君恩に代へる道なければ、叡聞に達するなり。われは仏法に帰

依しぬれば、遁世の他なしと引き籠り召さるれども、

わが娘めどの方、謀に命を捨て、最前焼き捨てし偽物の連判状は、誠に逆心あるかなきか知らせの狼煙。最早陳ずる詞はあらじ。サ何とく」

ときめつけられ

「チエ、無念口惜しやな。仕込みに仕込みしわが大望、現在の倅入鹿が手より洩れたるは、わが運命の尽きる所。さりながらこの蝦夷子世を去らば、見よく忽ち天地は常闇、月卿雲客思ひ知れ」

と肌押し寛げ腹切刀、腹に突き立て怒りの眼中

太刀取り後ろに大判事、はつしと落とす首諸共

矢一つ来たつて行主の、胸板射抜きあへなき最期

「こはそも如何に」

とびつくり仰天、途方に暮れて立ち惑へば

「ヤア、清澄、必ず驚く事なかれ」

と築山の岩間蔭、しづく出づる入鹿大臣

髪はおどろに麻衣、さも凄じき有髪の僧形

大判事ぎよつとして

「ヤア入定ありし入鹿公、不思議の対面訝し」と立ち寄れば

「ホ、美にもくさもあらん。不審の一条語つて聞か

せん。父蝦夷子叛逆の企てあれど、その器小さくして中々大望なり難し。これを以てこの入鹿、表には仁を飾り仏法帰依と引き籠り、油断の間を行法の築山より禁廷の宝蔵へ隠れ道、妙計違はず忍び入る。とくより評定ありしに違はず、神璽御鏡失せ給へど、叢雲の宝剣は易々と手に入つたり。父が命芥の如く見捨てしは、この時を待つ謀。ハ、ハ、あら心地よや潔し」と御殿に響く唸り声

『さては』と驚く大判事  
大臣重ねて

「馬鹿者の舅行主、血祭りに手に掛けた。その方はわが所存あれば、味方に付けばその通り。否と言はゞ行主同然、サア勝手次第に返事せよ」

と大悪不道の入鹿が振舞ひ

『ござ大事』と大判事、心を定め低頭平身

「時を得給ふ大臣に、いかでか違背申すべし。わが君と仰ぎ奉る」

と申し上ぐれば  
につこと笑ひ

「ホ、潔しく。三徳備はるこの入鹿、今日よりわれこそは万乗の主たり。ア、ラ忌はしの墨衣、いでや

## 二段目

### 猿沢池の段

出で、行く

世の憂さは、尊き卑きも亡き魂の、雲隠れせし思ひ人、采女の局の後慕ひ、勿体なくも万乗の帝の嘆き浅からず、御所を忍びの御車は、たゞ官女のみ道案内、盲目の君の御姿、哀れも勝るばかりなり

「この辺りが猿沢の池なるか」と仰せに

官女進み寄り

「この間久我之助清舟奏聞申せし通り、采女様入水の跡猿沢の池にて候ふ」

と申し上ぐれば

今更に、朝な夕なに傳きし采女の事の思はれて、御涙こそ限りなし

折しもこなたに浪人姿、御車近く手を仕へ

「女中方へお願ひ申す。帝様の御車とお見受け申した故、押して御願ひ申す事あり。憚りながら奏聞の御取次、頼み入る」

衣服を改めん」

と呼ばる声に  
数多の官女、手ん手に着せる綾錦  
立ち直つて大音声

「清澄は皇居の案内、玄蕃弥藤次しんがりせよ。これより禁裏へ馳せ向ひ、残る宝の有り所を責め問ひ、掴みひしいで心の儘。官人共来たれや」

と威風辺りを払ふ雪

御車『ハツ』と時めきて、内裏をさして出で、行く

と言ふ声

それと聞こし召し

「珍らしや淡海なるか」

と仰せに

猶も頭を下げ

「私、過ぎつる節会の時、神例の式を誤ち疾くよりも勅勘蒙り、市中にひそまりあるところ、蘇我蝦夷子我意を振ひ父鎌足も蟄居致させ、猶玉体も安からずと、聞くより前後顧みず、何卒玉体守護のため、勅勘お許し願ひ奉る」

と土にひれ伏し詫びにける

君叡感斜めならず

「朕が不徳のなすところか。蝦夷子叛逆の企てある事、入鹿大臣の忠義によつて事頭はれ、安倍行主を使ひに立てたれば、蝦夷子の自殺目のあたり。今より汝は元の淡海、再び忠勤励むべし」

とありがたき勅諭に

皆悦びを奏するところへ

禁廷の使ひ、息つきあへず馳せ参じ

「御注進、今日蝦夷子切腹ありしが、その子入鹿大臣、誠は親蝦夷子に勝る王位を望む大悪人。行主を殺し禁

廷に侵入し、公卿の面々或ひは蹴殺し切り倒し、上を下への大騒ぎ。猶も追々注進」

と呼ばり捨て、立ち帰ると皆々『ハツ』と驚きに分きて帝の御嘆き

「いかなる天の咎めぞや。思ひ計らぬ入鹿の悪心、われ四海の主として臥所さへなき身となるは、浅ましき境界」

と嘆かせ給ふ

淡海密かに官女の傍、耳に口する示し事

帝の前に手を付ひて

「思ひがけなき只今の注進。淡海これより遠見を致し、

安否を言上申すべし」

と盲目の君を休むる術、かなたの高見に急ぎ行く

後は心も心ならず案じ煩ひ居たりしが

暫くあつて淡海は、足音高く馳せ戻り

「只今遠見致せしところ、諸国の軍勢蟻の如く禁廷に

馳せ参じ、忽ち内裏は穩やかなり。早や入御ならせ給

へかし」

と誠しやかに相述べれば

主上は安堵の御思ひ、御悦びぞ限りなし

淡海は官女を制し

「ソレ、急いで還御」

と先に立ち、轅を取りて舍人役、押して行方はいづくとも、空定めなき空勇み、露踏み分けて

鹿殺しの段

迎り行く

谷山峰に輝かす数の松明螺鈿の、響きに連なる勢子の声、松の嵐もかまびすき

『すは良き時分』と芝六は、弓矢番ふて麓の方、木蔭に隠れ待つ所へ

「とゞさん、射止めさしやつたか」

「シイ」

鹿引担げ親子連れ、宿りをさして

掛乞の段

立ち帰る

三笠が本の雨宿り、烈しき嵐吹き来して、君が御遊の御車はこの荒屋に留まりし

獵師芝六が侘び住居、妻のお雉も健やかに、仕へ参らす

大君の、供御の仕掛けの米粒を、選るも女中の手ずさみに、紺の前垂緋の袴、打ち交りても女子同士、つひ馴れ

易き習ひなり

山を仕舞うて親子連れ、息せき背に大風呂敷、寒風に汗

たらしく下りのわが家の門

「嬢、今戻つた」

と内に入り

「これはく大切なお方々、何故端近う出しますぞ。

お前方もお前方、在所のねり物見る様なその大層なお

姿で、よろしくと出てござつては、何ぼう山家の一

つ家でも、誰が見まいものぢやない。お局方も年中神子

殿の様に、その長い物をこの狭い内で引き摺つたら、

裾踏んで転けさつしやろ。それでコレ、奈良の町でよ

い流れ買うて来た。サ、これとお召し替へ」

と風呂敷解いて取り出だし、着せるとてらの桁丈も、哀

れ昨日の長袖を、在所小紋のかます袖、似せ兜羅綿の平

田帯、根から似合はぬ御装束

「矢瀬のげらを見る様な。名も変へて大納言兵衛さん」

「こちらが髪も町風に島田とやらに結び直し、おあち

や、おいちやにお梅が香」

「アイ、在所の嬢の風俗は憚りながら私が伝授」

「アコリヤ嬢、上様の御膳はまだか。何れも様も、さ

ぞ御空腹にござりませう」

「イヤく、心遣ひ無用々々。帝さへ御安泰なれば

臣らが事は苦しからず」

と殿上人も世に連れて、掛り人の身の気の毒顔

「イエく、何ぼう尋常に仰つても、内裏様も喰はに

や立てらぬ。思ひなしか昨日からめつきりと顔が細つ

た。嬢、ちやつと握り飯などして上げい」

と亭主は如才内証の、しがをくろめてゐるところへ

腰に帳面ぶらくこゝへ、郡山の搗米屋

「内方にござんすか」

「オ、新右衛門さん、ようお出でたれど折悪う今日は」

「オツトお内儀、又留守と言ふのか。晦日に来るとい

つでも朝から内にぬ故、今日は留守を言はさぬ様に、

朔日に仕掛けた。エ、去年の尻残りが六十六匁三分五

厘、いつまで釣り付けるのぢや。サ、今、今、今、今、

受け取らう」

と辺り響かす声高々

大納言押し止め

「ヤヨ下々の者、いとはしたなき争ひかな。静まれよ

や一

とありければ

「ヤア、貴様何ぢや。ハア手の筋見る人か。コレ茶一  
つ汲んで下あれ」

「オ、滅相な、あなた方は大事のお客」

「何ぢや客ぢや。米代も払はずに、あんなけない人取  
り込んで、まだ米屋を銜るのぢやの。コレ喰らひ潰し  
達、俺が喚ぐが無理かこの書出し。ソレ見やしやれい」

「ムウ、この切紙は色紙の形、さては歌か」

とつくづく眺め

「テ珍しき五つ文字。書き出だし、一つ米代六十六つ、  
去年の霜月残る銀。これは恋歌とも思はれず」

「イヤ恋も恋、借錢乞ひぢや。貴様も掛り人ならよう  
聞かしやれ。ここの芝六は盗人ぢや。かう言ふが無念  
なら、サ金払へ。がかうは言ふものゝコレ嬢衆、こな  
さんの心次第で結構な了簡があるになあ。あの薄い芝  
六に百目近う仕送つたは、しやりから付け入つて貴様  
の舍利塔。疾うから念掛けてゐるに、しやりとてはマ  
胸欲な。留守が定ならコレどうぞ」

とひつたりと抱き付けば

「ア、コレ、何さしやんす。主が内にゐやしやんすぞ

え一

「ヤア、オ、内にゐるなら、金受け取らうわい」

「ム、イ、エ、留守ぢやわいなあ」

「留守ならちよつと」

と又取り付く

首筋挿んで板間にどつさり

びつくりしながら負けぬ顔

「ヤア芝六、それ程内にゐながらよう留守使ふなあ。

サ米代受け取るかい」

「イヤ、米代は渡してある」

「そりやいつ渡した」

「ムウ、密夫の代三百目の内で六十六匁引いて後が二

百三十四匁。こつちへ今受け取らう」

「ヤア、それは」

「サア、今渡せ」

「サア、サアくくく」

と詰めかけられ

ぎつちり詰まつた入口つしやり、門から閉めて

「ムウ留守ぢや。密夫代も米代も逢ひさへせねば取り

遣りなし。留守は五分々々、算用済んだ」

とお留守になつた腰の骨、ちがく

## 万歳の段

引き摺り逃げ帰る

姿は地下に落ちながら、心の官位右近衛の、中将淡海公  
するくくと立ち出で

「兼秋卿、君にもますますくく叡慮めでたく御渡り。これ  
といふも芝六夫婦が親切、御目盲させ給ふを幸ひ、こ  
の荒屋をやはり禁裏の御殿の内と、偽りすかし参ら  
する我々が気苦労。この上ながら御悟りなき様に」

と詞半ばの破れ置

「出御なり」

と警蹕の声諸共に

押し開くる、明り障子の御格子に  
御いたはしや天皇は、この賤が家とは夢にだに、白平絹  
に緋の袴、褥に玉座なりければ

各々『シイ』と公卿達、威儀を正して拝謁ある

「ヤヨ淡海、こゝは常寧殿よな。それに詰めしは誰々  
ぞ」

「ハ、大納言兼秋、その他参議中将、百官百司残らず

参内仕る」

「誠にこの月は内侍所の御神楽。病平癒の祈りなれば、  
楽人共を召し出だし、寿の管絃を始めよ。早や疾く

く」

と仰せに

びつくり

「ハツ、ハ、ハツ」

とばかり、俄に管絃の才覚も、出でて返らぬ論言の  
冷汗ながら

「ハ、ハ、これはよき思し召し。楽人只今追付けこれ  
と立ち端のしほに芝六が、手を引いて門に出で

「さて迷惑な勅詔。俄に管絃のお望み、たとへ出来る  
にしてから、笛太鼓で騒ぎ立てゝは、忽ち人に御在処  
を知らるゝ難儀。なんと智恵はあるまいか」

「ム、サア、智恵といふて私らがてこに負へぬ楽とや  
ら舞ひとやら。一体お前がこんな内で、太平楽を仰る  
からぢや。オ、なんとこれはどうあらう。私暫く広  
瀬にゐた故、べれくゝ万歳を覚えてゐます。坊主めに  
舞はして私が小鼓、管絃の代りにはなるまいか」

「大事ないく、オ、それ究竟」





と聞いてびつくり

「オ、コレ、コレくぼん、わが身は先まへにから何処へ往むかてあやつた」

「アイ、わしやこの状持つて、あの坊さんの内へ往て連れ立つつて戻かえつた」

と言ふに

怪しと引取つて、読む度々に胸どきく

「何ぢや、『お尋ねの鹿を殺し候者は、私兄の三作に違ひござなく候』ムウ、そんならこの書付けを」

「ア、わしが持つて往た。サ兄さん、賃下され、饅頭欲しい」

と頑こ是こなき

「エ、何言ふのぢや、つともう。性もない子供の言ふ事、取り上げて下さりませなえ。ノウ三作、なんのそなたがその様な法度を破つてたまるものか。サ、ちやつと言ひ訳しやいの」

と突き出だせば

顔振り上げ

「いかにも弟が訴人の通り、鹿殺しは私でござります」

「ア、コレ、コレくそなたは気が上のぼつたか。ア、コレ狼狽ろうたいへる、狼狽ろうたいへるところぢやないぞや」

「イ、エ、狼狽ろうたいへはしませぬ。わしが手にした事、覚えのない狩人の仲間の衆に吟味が掛かり、ひよつとどうした人違ちがへで、とゝさんの難儀なんぎにならうも知れぬ。

それが悲しき、尋常じんじょうに名乗つて出ます。常々お前の話にも、今のとゝさんは義理のある親ぢや程に、猶大切に孝行こうぎょうにせいとな、それ言はしやつたをわしや、よう覚えてゐますわいの。わしが仕置しちきに合ふた後で、父様の泣かしやれぬ様に、京の町へ奉公ほうこうに遣つたと言うて置いて下されや。これからは杉松をわしと二人前、可愛がつてや。鹿や兎の命を取ればどうで末はかうなるもの。せめてあれ一人は狩人さして下さるな。それ

ばつかりを頼みます。さらばでござる、かゝさん」

と親の代りに罪科つみかを、引き受ける氣の立派さを

思ひ合はせて『ハア、ハツ』と、今さら未練な止め様も抗あひがひ様も泣いぢやくり

「さても、さても。健気けんきなと言はうか。産んだ子ながら恥づかしい。義理ある後の親夫、わしやまだ恩を得

送らぬに、大人も及ばぬ発明は一生の智恵も寿命も十三年につづめたか。こんな子を持つた親とひけらかしたい稀まれな子を、世にも稀なる大垣の土の中へ生きながら石子詰いしづめで殺すとはなんぼ前世の約束でも、あんまり

患うれひを払たふ玉簪たまはな、いかな大事も好物に、酔うてはころり芝六しばろくが、機嫌きげん上戸じやうこのちろく戻り

「ヤア女性にょせい、これにおはするか。この冷えるに地辺じべにころりは、ア、さては貴様も酔よひ醒さましたか。久しぶりの色事いろこと、ド、ドレ抱かいてやろう」

と手を取れば

「ヤアこちの人か、ハア悲しや」

「南無三、きやつ泣き上戸じやうこぢやアハ、。われら悲しうても笑ふ、貴様はめでたい事にも泣く。イヤ又、この様な嬉しい折から、祝いわうて一つ泣き給へ」

と余念あつせん他愛たあいも泣き顔を

見せじと妻も氣を取り直し、泣くく笑顔繕つくろひて

「ほんに又何処どこでやら、きつい機嫌きげんで戻かえらしやんした。さうしてマア最前の捕手の侍、取り巻かれてござんした、その仕舞しまいひはどう付いたえ」

「さればく、そこをぬかつて良いものか。コ、コ、この良う廻る舌を以て立板たていに水を流す如く、とんと

匿かくまひませぬにしてすつぱりと言ひ抜けて戻つた。雨降つて地固ちこまると、これからは猶あなた様も帯紐おびひも解いてお匿かくまひ申し良い、良いといふものぢや。ナア、そぢやないか。お天子様のご機嫌きげんはどうぢやな。マア悦よろこび

と引立つる

「ノウこれ胸欲むねほな、いは畜生一疋を殺した科をそれ程の御成敗にも及ぶまい。御出家のお慈悲には、どうぞく助けて下さりませ。叶はぬ事なら土の中、母も一緒に埋うんで」

と取り付く島も袂たもとの岸、涙に漂なぶ浮うかれ船、縄目の綱は親子の別れ、見返みかへる姿霧霞きりせ、飛ぶが如くに引立て行く

母は正体腰ただたいこも抜け

「ヤレ、ヤレく三作よ、待つてくれ。思へばく今日けふの日は、わが身一人の悪日あくじちか。由緒正よしただしい武士の子を一生狩人山賤やまぢに朽ち果くてさするばかりかは。所の法

に行はれ、非業ひがふの死は殺生の罰ばちか報はらひか悲しや」

と土辺つちべに蹉跎さだと身を打ち付け、声をはかりの焦あせがれ泣き

や、今日の日天様(にってん)がかぐれ様にならしやましたらこそ、かういふ内へお成りなされて下さるといふは、ありがたいと言はふか、忝(かたじけなく)ないと言はふか、めでたいと言はふか、嬉しいと言はふか。これが、これが悦ばずにおられふか。ハ、ハ、ハ、ナアそぢやないか。まだ嬉しい事があるは。明日の明け六つがごとんと鳴ると鎌足様がこゝへござる。そこで勘当御赦されるはず。淡海様の請け合ひぢや。日頃の願ひ叶ふは明日、余り嬉しさ身祝ひに、呑酒屋叩き起して御神酒(おみき)五合供へた。エ、忝ないくアハ、ハ、ハ、コリヤ坊主よ、明日から元の侍になつて、われにも大小差さすぞよ。兄は何処にゐるぞ、三作よ、作よく」

は胸を裂く、妻の苦しみ

「イ、エイナ、作はお前の戻りが遅さ。一人獵に行くと言つて」

「エ、夜の内に何処へ滅相(めつさう)な。もう獵師はさゝぬ。誠の弓取りに仕立てるは、明日の夜が明け次第、もうそろく白みかけるは。出世の雲が見えるぞく。ア、ありがたいくアハ、ハ、ハ。早う明け六つが鳴つて下され、お天道様頼んます、頼んます」

と祈る夫が空を見つ

蒲団の内も血の涙、寝入り伏したる幼な子の、咽笛(うづ)畳に縫うたる刃

「ヤア杉松を惨たらしい。酔ひ狂ひか、乱心か」

と涙もいつぞ狼狽(ろうたい)へて、咽へ流るゝ呆れ泣き

芝六居直つて声を上げ

「中将淡海公へ申し上ぐる。玄上太郎が心底を御疑ひ遊ばされ、最前の捕手は拙者が心を引き見給ふ鎌足公の廻し者、と氣は付きながら情けない。人質に心迷ひ、いよく以て御疑ひを重ねたれば、天子もこゝには置き給はじ。冥加に叶ひ一天の君を匿ひ申す、身の大慶も水の泡。勘当御免もなき時は、生きても死しても返らぬ心外、倅を切つても他言致さぬ魂を今改めて御覽に入れる。コリヤ女房、張り詰めた太郎が義心、大事の心底見せ損なうたは三作といふそなたの連れ子。元は秦益勝といふ楽官の女房、蝦夷子の讒(ざん)にて潰れた家、力になつて下されと頼まれての後連れ。義理のある子が枷(か)になつて、鎌足公に根性を見下げられたが口惜しさに、刺し殺したは二人が仲に出来たこの杉松。科はなけれども主人へ面晴れ、鬼になつてと酔うた顔、酒ではなうて剣を飲む、侍の義理が敵ぢやと思ひ諦め、坊主が代りに随分兄を可愛がつてやりやいの」

覗く表も裏表、夜明けはわが子の最期時(さいごじどき)

『どうぞこの夜が百年も明けずにあつてくれかし』と胸の巷の色々に、嬉しいも六つ、悲しいも六つ無量の物思ひ

「ア、おりやもう今夜は、丁度元日を待つ心地ぢや。果報は寝て待て、ちつとの間稻(いね)つまう。坊主は俺が懐に」

とこつぼり被る蒲団より

早やとろくの草臥れ寝入り、何にも知らぬ悦び寝顔

『それと言うたら三作が、心も無足に夫の命、それも悲し、わが子も可愛し』心は千々に鳴る鐘を、早や撞き出だす興福寺

「ハア南無三宝、あの鐘の数に縮まる子の寿命。一つの命を二つに分け、養ひ親への孝行心、褒めてやつて下され」

と言ふも言はれぬ女房が心の苦痛三つ四つ、重ねて響く胸先は斧(おの)鉞(まさかり)に打たるゝ心地、五体五つに何時の世の、報ひをこゝに修羅の鐘打ち切る六つは

「ヤア知死期(ちしご)か」

とわつと叫ぶは一時に

とどうど座して泣きければ

「ノウコレ、それ程に思うて下さるその兄の三作は、鹿殺しの科人になつて、縛られて往たわいな」

「ヤ、ハ、すりや俺が科を身に引き受けて、名乗つて往たか。エ、それ殺しては」

と狂気の如く駆け出す弓手(ゆんで)の岩壁に

「太郎暫し」

と声あつて

内大臣鎌足公、神事の礼服小忌衣(おみじろも)、心葉の冠(かむり)梅が香の匂ひ残れる采女の御方

手に捧げたる内待所悠然と出で給ひ

「玄上太郎、心底確かに見届けたり。われ敵の乱を避け余所ながら守護する天子、一日にてもその方が御難を避けしは天晴れ忠義。入鹿が心を掛けたる采女、久我之助に言ひ含め、猿沢の池に入水(じゆすい)としてこの興福寺の山奥に鎌足諸共隠れ住む。今日計らず汝が倅、大垣の刑に行ふところ、不思議に命助かつたり。三作、参れ」

と仰せの下

上下改めしづくくと携へ持ちし宝の箱、明けてわが子の無事な顔

「ヤア、まだ生きてみてくれたか」  
と思ひがけなき夫婦が悦び

「オ、不審尤も。天皇御惱の祈りのため、天の岩戸の古例を引き、天照大神に祈誓を掛け、百日の行満する今日、争ひ難き神の力、刑罰の地に掘り穿つ。土中に怪しき光り物、よくく見れば、先年失せさせ給ひたる内侍所神璽の御箱。入鹿が父蝦夷子大臣、疾くより謀叛の根差しにて埋み隠せし二色の宝、現はれ出でしはこれ正に神明の助け給ふ三作が命。今改めて鎌足が二代の忠臣、さりながら鹿を殺せし春日の掟、同じ血筋の弟が、死骸を埋み刑罰の表を立て、菩提のため、印の石のその上に撞鐘一字は鎌足が改めて建立せん」と仰せは今に暁の、六つに死したる七つ子の、数を合はして十三鐘の、音にぞ哀れ残りける

鎌足重ねて  
「この八咫の御鏡は、天照御神の御影を写せし御正体。勿体なくも蝦夷子大臣、穢れし土中に埋み置く。その故にこそ一天の御影を曇らせ、御目盲させ給ひしも、日月の鏡曇りし故、わが行法の今日に當つて、御鏡出でさせ給ふ事、常闇の世の岩戸を開き、天照神と天皇の御対面の時至れり。出御なるぞ」

### 三段目

#### 太宰館の段

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館、入鹿公の御成とて、ざざめき渡る奥女中  
召しに依じて大判事清澄、袴の褰も角菱ある、不和なる中の定高が屋敷、互ひにそれと白書院  
目札もせずと通り  
「入鹿公の御座の間へ、誰そ案内仕れ」  
と言ひ捨て、行かんすとす  
定高声掛け

「まづ暫く、珍らしや大判事殿、太宰の少弐が跡目を預かる妾が屋敷、挨拶もなくお通りは、女と思ひ侮つてか。たゞし武家の礼儀御存しなくば、ちつと御伝授申さうか」

と詞の非太刀、打掛捌き  
騒がぬ清澄空嘯き  
「少弐存生より領地の遺恨により、この屋敷の内へは今日まで足踏みもせぬ大判事。入鹿公の御召しによつて参つたは、勅詔を重んずる故、皇居の間へ出仕の心。

と奏聞の

声に依じて淡海公、御手を取つて立ち出づる  
折から向ふ鏡の光、朝日の影に輝きて、忽ち御目も明らか

「ノウ懐しの帝様、采女これに」

と走り寄り、互ひに床しき物語り、御恋仲も畏れあり

「ヤアく太郎、汝が射たる爪黒の鹿は入鹿が調伏にて、やがて太平万乗の御代しろし召す暫くも、民間に落ち給ひしは、天より地中に落ち給ふ、これぞ稀なる天智帝。御目もまさに秋の田の刈穂の庵の仮御殿、木の丸殿に准へて、今日出陣の城廓に悪魔追伏興福寺はわが藤原の氏の寺、いざやこれより臨幸」

と先を払つて鎌足の、威風りんく論言の  
汗か涙の露に濡れ、草葉に置ける芝六が、妻恋ふ雉子や子故の闇

明けても暗き六つ七つ十一、十二、十三鐘の古蹟を今に伝へける

女童に用なければ、挨拶する口は持たぬ」

「イ、ヤそれなれば猶以て、今日入鹿様御成なれば大内も同然。大判事に御疑ひの事あつて、この定高に吟味致せとの勅詔。この詮議済まぬ内は、一寸も御前へは叶はぬ。お控へなされ清澄殿」

「ム、テ珍らしき事を聞く。君御詮議の筋あらば、検非違使に仰せて、拷問あらんに何の御遠慮。もとより御疑ひ蒙るべき覚えなし。生ぬるき女の吟味、受け様な清澄でおりない。お身、見事詮議して見るか」

「オ、太宰の後家この定高が、きつと詮議して見せふ」

「ヤア小癩な。そこ退いて早や通せ」

「罷りならぬ」

と根に持つ遺恨  
互ひに折れぬ老木の柳  
松の間の襖押し開かせ

「出御なり」

と警蹕の

声に二人も飛び退り、恐れ入つたるばかりなり  
入鹿の大臣寛然と、上段の櫛より遙かに見下し

「ヤア大判事、未明より参内せよと勅使を立つるに甚だの遅参。アレ見よ、今日は午の上刻。流星南に出で、

北に拱くするは、万乗の位に即くまろが吉星。それ程の事知らぬ大判事でなし。たゞし入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退かん下心か。緩怠なり」と極め付くれば

「ハ、コハ御説とも覚えす。今一天四海、君の御手に属するとはいひながら、未だ残党先帝に心を寄する輩あつて帝都を窺ふ折から、われらが領地紀伊国は西国南海の咽喉にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅参。その上、忠臣第一の大判事に何事の御疑ひ」と憚りなくぞ申しける

「ホ、その子細といつば、先帝の思ひ者采女の局を、まろが后妃に定めんと、行方を尋ね求めるところ、猿沢の池へ入水せし由。いかにしても合点行かず、察するところ采女が在処は、大判事、そちがよく知らうがな」と思ひがけなき疑ひに

清澄不審の眉をしはめ

「コハ存じ寄らざる儀。その采女の御事は、猿沢の池に捨身ありしとは誰知らぬ者ごなきに、われらが行方存ぜしなどは、何を目当ての御仰せなるぞや」と

とお疑ひは恐れながら

「言ふな女め。さほど音信不通の仲なるに、大判事が倅久我之助、そちが娘雛鳥と密通致しをるは如何に。

イ、ヤ知るまじと思ふか。倅共が縁に繋がれたる汝らなれば、両方共に吟味は逃れぬ。なんと肝に堪えうが」と飽くまで邪智の一言に

何思ひけん大判事、席を蹴立て、行かんとなす  
すかさず定高が刀の鑑むんずと取り

「コレ待ち給へ、清澄殿。氣相変へてコリヤいづくへ」と

「ヤアいづくへとは。親々が不和なる仲を存じながら、忍び逢ふ倅が不所存。引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸ひに和睦せしと言はれては、わが家の恥辱となる」と

「オ、そりやこの方も同じ事。一旦は武士の意地、今更仲が直りたいばかりに、娘にわざと不義させしと、世上の人に蔑せられては、過ぎ逝き給ふ夫へ立たぬ。妾も共に」と

と裾引き上げ、駆け出す二人を  
はつたと睨め

「ヤア私の趣意に立ち騒ぐ尾籠奴。おのれらが倅の不義を吟味はせぬ。まろが尋ぬるは采女が在処、サアいづれからなりと早く言へ。何とく」と

「ヤアとぼけな。汝が倅久我之助は采女が付人ならずや。その親たるそちなれば、よも知らぬとは言はれまい。サア真直に白状せよ。陳ずるにおいては計ふべき旨あり」と

「イヤノウ大判事殿、お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とはこの事。サ、覚えがあらば申されよ」と言はせも立てず

「ヤア黙り召され。女の差し出る所でなし」と

「イ、ヤ勅説を受けての詮議なれば、勅答の有無によつて、その座はちつとも立たしはせじ」と

と膝立て直し詰め寄つて、双方挑み争ふたり  
入鹿の大臣大口開き

「ハ、ハ、イ、ヤ巧んだり拵えたり。定高が領分大和の妹山、清澄が領地紀伊国背山、隣国境目の論により、互ひに確執せしとは表の見せかけ。内々には申し合はせ、故主の帝へ心を通はすおのれらと、わが眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は、両家の内に隠し置かんも知れざる故、大判事が詮議を申し付けた定高、コリヤそちにもこの疑ひは掛かるぞよ」と

「これは又、君の勅説とも覚えませぬ。夫少式より仲悪しき大判事殿、何故申し合はさう様もなし。私にま

「ア、イヤ、倅が性根はいざ知らず、采女殿の儀はかつて存ぜず。わが詞に偽りあらば、弓矢神の御罰を受けん」と  
と刀すらりと抜き放し、丁々と金打ち

「この上にも御疑ひあらば、いか程の拷問なりとも、サア遊ばせ」と

とどつかと座す

「オ、妾とても少式が妻。家に換へて采女殿は匿はぬ。水責め火責めに逢ふとも知らぬ事は存じませぬ」と詞鋭どに言ひ放す

「ム、しからば采女が詮議は追つて。まづ汝らが面晴れなれば、匿はぬといふ潔白に、定高は雛鳥を入内させよ。また大判事も覚えなきに相違なくば、久我之助を今日より朕が目通りへ出勤させよ。きつとその旨心得よ」と

と何がな探る当座の難題

二人は胸にぎつくりと、答へも暫しなかりしが  
やゝあつて詞を揃へ

「かくありがたき勅説を」と

「互ひの子供が違背致さば」と

「オ、言ふにや及ぶ」と

と辺りなる、生け置く桜の一枝押取り

「得心すれば榮える花、背くにおいては忽ちに、まろが威勢の嵐に当てまつこの通り」

と欄おぼしに、はつしと打ち折り落花微塵

『ハツ』とばかりに親々の、心も共に散乱せり

猶もゆるまぬ大音上

「ヤア／＼弥藤次、早く参れ。汝は百里照の目鏡を以て香具山の絶頂よりきつと遠見を仕れ。コリヤ／＼兩人、よつく聞け。もし少しでも容赦致さば両家は没収、従類までも絶やするぞ。性根を定め早や行け」

と急ぎ立つ詫意に

親々の思ひは千々の胸の中、見せぬ面に忠と義を、張り詰めし気のためみなく、打ち連れてこそ出で、行く誠に秦の趙高が馬と欺く小牡鹿の、入鹿が威勢ぞ類ひなき

かゝる所へ中門より追ひ／＼駆け入る鎧武者

「御注進」

と呼ば／＼つて、御白州に頭を下げ

「河内の国に武知郡司安彦、先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを、官軍残らず馳せ向ひ、敵を攻め付け一昼夜に落城。大和に安曇文次宗秀、当麻の辺りに陣を

取り、南都を攻むるその結構、馳せ向うて戦ひしに、

味方の官軍利を失ひ、残らず敗北仕る」

と息つきあへず言上すれば

「ハ、ハ、物数ならぬ逆徒の奴ばら、朕馳せ向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし稀代の名馬、吉野の牧より狩り出したるその馬引け」

と広庭へ引き出ださせ

欄おぼしよりひらりと、打ち乗る名馬の勇み

手綱たづなかいくりしと／＼／＼

轡くわの音はりん／＼／＼

綸言誰か背くべき、大地狭しと馬上の勢ひ

刻む蹄ひづめも巷の鈇こたま

「いそうれやつ」

と出陣の駒を早めて

### 妹山背山の段

駆けり行く

古いにしえの神代の昔山跡の、国は都の始めにて、妹背の始め山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、実に世

に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨て所

妹山は太宰の小式国人の領地にて、川へ見越しの下館背山の方は大判事清澄の領内、子息清舟いつぞやより、

こゝに勘気の山住居、伴ふものは単立ち鳥、餌かたとわれとたゞ二つ、経読む鳥の音も澄みて、心細くも哀れなり

頃は弥生の初めつ方、こなたの亭には雛鳥の、気を慰めの雛祭、桃の節句の供へ物、萩の強飯こわい腰元の、小菊桔梗が配膳の、腰もすうわり春風に、柳の楊枝よし端近く

「ノウ小菊、いつものお雛は御殿でお祭りなされるけれど、姫様のおしつらひで、この山岸の仮座敷。谷川を見晴らし桜の見飽き、雛様も一入ひしお気が晴れて良からうの。こちらも追付け良い殿御持つたら、常住あの方に引付いてゐたら嬉しかろ」

「ノウ桔梗の何言やるやら。何ぼ女夫並んでゐても、あのように行儀に畏まつてばかりゐて手を握る事さへならぬ、窮屈な契りは嫌。肝心の寝る時は離ればなれの箱の内、思ひの絶える間はあるまい」

と仇口々も

雛鳥の、胸にあたりの人目せく

「辛ひ恋路のその中に、親と親とは昔より、御仲不和の関となり、逢ふ事さへも片糸の、結ばれ解けぬわが

思ひ。恋し床しい清舟様、この山のあなたにと、聞いたを便り母様へ、お願ひ申してこの仮屋。お顔が見たさの出養生、こゝ迄は来たれども、山と山とが領分の境の川に隔てられ、物言ひ交はず事さへもならぬわが身の儘ならぬ、今は中々思ひの種、いつそ隔てゝ恋ひ侘びる、逢はれぬ昔がましぞかし」

と切なる思ひかき口説き、嘆けば  
共に腰元共

「オ、お道理でござります。ほんにひよんな色事で、隣同士の紀伊国大和、御領分の競り合ひで、お二人の親御様はすれ／＼、雛鳥様と久我様の妹背の仲を引き分くる妹山背山。船も筏いかたも御法度で、たつたこの川一つ、つい渡られさうなもの。小菊、瀬踏みして見やらぬか」

「オ、滅相な。この谷川の逆落し、紀州浦へ一てきに流れて往たら鮫の餌食。したが申し雛鳥様、お前の病気をお案じなされ、この仮屋へ出養生さしなさつたは、余所ながら久我様に、お前を逢はず後室様の粹なお捌き。女夫にして下さりませと、直にお願ひ遊ばしたら、よもや嫌とは岩橋の、渡る事こそならずとも、せめて遠目にお姿を」

と障子ぐわらりと縁端に、覗きこぼるゝ腰元共  
久我之助は鬱々と

「父の行末身の上を、守らせ給へ」  
と心中に、念彼観音の経机、案じ入たる顔形  
手に取る様に

「ノウあれく、机に凭れて久我様の、物思はしいお  
顔持ち。お癪がな起りつらん。エ、お傍へ行きたい。  
コレ、こゝにあるわいな」

と言へど招けど谷川の、漲る音に紛れてや  
聞こえぬ辛さ

「ア、辛気、こちらが思ふ様にもない。コレこつちや  
向いて見たがよい」

と焦るお傍に気の付きく  
「ほんにそれよ。口で言はれぬ心の長け」

兼ねて認め奥山の鹿の巻筆封じ文、恋し小石に括り添へ  
女の念の通ぜよと、祈願を込めて打つ礫、からりと川に  
落ち滝津、波に堰かれて流れ行く

「エ、鈍な、心の念は届いても、女力の届かねば思  
うたばかり片便り。返事を松浦佐用姫の、石になりと  
もならない」

とひれ伏す山の甲斐もなき

久我之助川に目を付け

「いづくよりか水中に打つたる石は重けれど、逆巻く  
水の勢ひに、沈みもやらず流るゝは、ム、重き君も、  
入鹿といふ逆臣の水の勢ひには敵対難き時代の習ひ。  
それを知つて暫しの内、敵に従ふ父大判事殿の心。善  
か悪かを三つ柏。水に沈めば願ひ叶はず、浮かむ時は  
願成就。吉野を飯の御祓川、大神宮へ朝拝せん」

と柏の若葉摘み取つて、谷を伝ひに水の面  
見遣る女中が

「申し、今の小石が届いたか。久我様が川へ下り  
なざるゝ、あの岩角の折曲りが川幅がいつち狭い。ム  
幸ひのよい逢瀬」

と言ふに嬉しき雛鳥の、飛び立つばかり振袖も、裾もほ  
らく坂道を折から風に散る花の、桜が中の立ち姿、し  
どけ難所も厭ひなく

「ノウ久我様か、なつかしや」  
と言ふに

思はず清舟も

「雛鳥無事で」

と顔と  
顔

見合はずばかり遠間の

心ばかりが抱き合ひ

詮方涙先立てり

「申し清舟様、わしやお前に逢ひたさに、病氣と言ひ  
立てこゝ迄は来て居れど、親の赦さぬ中垣に、忍んで  
通ふ事叶はず。女雛男雛も年に一度は七夕の、逢瀬は  
あるにこの様に、お顔見ながら添ふ事のならぬは何の  
報ひぞや。妹背の山の中を隔つ吉野の川に、鵲の橋は  
ないか」

と口説き言

聞く清舟も楫あらば、早や渡りたき床しさを胸に包みて  
「道理々々。われも心は飛び立てど、この川の法度厳  
しきは、親々の不和ばかりでない。今入鹿世を取つて  
君臣上下心々。隣国近辺といへ共、親しみあれば徒党  
の企てあらんかと、互ひに通路を禁めて船を止めた  
るこの川は、領分を分ける関所も同然。命だにあるな  
らば、又逢ふ事もあるべきぞ。今流したる水の柏、波  
にもまれて浮みしは、心の願ひ叶ふ知らせ。入鹿が控  
厳しければ、われも世上を憚りてこの山奥の隠れ住み。  
心の儘に鶯の声は聞けども籠鳥の、雲居を慕ふ身の  
上を思ひ遣られよ雛鳥」

と儘ならぬ世を恨み泣き

「ノウ又逢ふ事もあらうとは、別るゝ時の捨て詞。た  
とへ未来のとゝ様に御勘当受けるとも、わしやお前の  
女房ぢや。とても叶はぬ浮世なら、法度を破つてこの  
川の、早瀬の波も厭ふまじ。いづくいかなる方へなど、  
連れて退いて下さんせ。私はそこへ行きます」

と既に飛び込む川岸に  
慌て驚き留むる腰元

「イヤく放しや」

と泣き入る娘

「ヤレ短慮なり雛鳥、山川のこの早瀬、水練を得たる  
者だに渡り難きこの難所。忽ち命を失ふのみか、母後  
室に嘆きを掛けわれにもいよく憎しみ掛かる。科に  
科を重ねる道理。コレく、コレく、必ず早まり  
召されな」

と制する詞一筋に

思ひ詰めたる女気も、今更弱る折こそあれ

「大判事清澄様御入」

『ハツ』と驚き久我之助、帰るを名残り  
押し止むるも、わが身をわが身の儘ならず

「コレノウ待つて」

の声ばかり

「後室様御出で」

告ぐる下部に詮方も、泣くく庵の打ち惜れ、登る坂さへ別れ路は、力難所を行く心地、空に知られぬ花曇り花を歩めど武士の、心の嶮岨刀して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂く、川辺伝ひに大判事清澄

こなたの岸より太宰の後室、定かにそれと道分けの、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔て、

「大判事様、御役目御苦労に存じます」

と声打掛をかい取りの、夫の魂放さぬ式礼清澄も一揖し

「早かつし定高殿、御前を下るも一時、参る所も一つなれども、この背山は身が領分、妹山は其元の御支配。川向ひの喧嘩とやら、睨み合つて日を送るこの年月、心解けるか解けぬかは、今日の役目の落居次第。二つ一つの勅命、狼狽へた捌き召さるな」

と毗くしやつく茨道

脇へかはして  
「仰せの通り、入鹿様の御誼意はお互ひに子供の身上。受け合つては帰りながら、身腹分けても心は別々。もし『アツ』と申さぬ時は、マアお前にはどうせうと

思し召す」

「テ知れた事。御前で承つた通り、首打ち放す分の事さ。不所存な倅はあつて益なく、なうて事欠けず。身の内の腐りは殺いで捨つるが後の養生。畢竟親の子のと名を付けるは人間の私。天地から見るとは、同じ世界に湧いた虫。ヤモ別に不憫とは存じ申さぬ」

「テきつい思し切り。私は又いかう了簡が違ひます。女子の未練な心からは、わが子が可愛うて存じませぬ。その代りに、お前の御子息様の事は真実何共存じませぬ。たゞ大切なはこの娘、忝ない入鹿様のお声の掛かつた身の幸ひ。たとへどう申さうとも母が勧めて入内させ、お后様と多くの人に敬ひ傳かさうと思へば、この様な嬉しい事はござりませぬ。オホ、」

と空笑ひ

「ムウ、シテ又得心せぬ時は」

「テそりやもう是非に及ばぬ。枝振り悪い桜木は、切つて接ぎ木を致さねば、太宰の家が立ちませぬ」

「ム、さうなくては叶ふまい。この方の倅とても得心すれば身の出世。栄花を咲かすこの一枝。川へ流すが知らせの返答。盛りながらに流るゝは吉左右。花を散らして枝ばかり流るゝならば、倅が絶命と思はれよ」

「いかにも。この方もこの一枝。娘の命生け花を、散らさぬ様に致しませう」

「オ、サ、今一時が互ひの瀬越し。この国境は生死の境。返答の善悪によつて、遺恨に遺恨を重ねるか」  
「サア、これ迄の意趣を流して、仲吉野川と落ち合ふか」

「まづそれ迄は双方の領分」

「お捌きを待つてをります」

と詞峙つ親と

親

山と

大和路分かれても  
変らぬ紀伊の路恩愛の  
胸は霞に埋もれし庵の  
内に別れ入る  
立派に言ひは放しても、定かに知らぬ子の心、覚束なくも呼子鳥

「娘、娘」

と谷の戸に音なふ初音

雛鳥も母の機嫌を差し足に

「かゝ様、ようぞ。今日はおめでたう存じます」

と武家の行儀の三つ指に  
堅い程猶親子の親しみ

「オ、よう飾りが出来ました。今日はそなたの顔持ちも良さうで、ひとしほめでたい。母も祝うて献上のこの花、供へてたも。いくつになつても雛祭は嬉しいもの。女子共、何なりと娘が気に合ふ遊びをして、随分と諫めてくれ」

と何時に勝れし後室の

機嫌は訴訟のよい出汝

「今のをちやつと乗り出して御覧ませ」

と腰元に、腰押されても

とやかうと、言ひそゝくれの纏れ髪

「イヤノウ雛鳥、背丈延びた娘を親の傍に引き付けて置けば結句病ひの種。それで急に思案を極め、そなたによい殿御を持たす。嫁入さすが嬉しいか」

「エ、」

「ハテ気遣ひしやんな。可愛いゝ娘の一生を任す夫、そなたの気に入らぬ男を何の母が持たさうぞ。ナア腰元共」

「ハイ、左様でござります。お気の通つた後室様、嫁入の先は大方今の、ナ、焦がるゝ君でござりませう」

と押し推当てども得手勝手

誰にか縁を組紐に、胸は真紅の塞がる箱、取り出だし

「妹背を並ぶる雛の日は嫁入の吉日、この箱の主は極まる殿御、雛の御前で夫定め。コレ、そなたの夫といふは誰あらう、入鹿大臣様ぢやわいの」

「エ、そんなら私を嫁入さすとは」

「オ、太宰の小忒が娘雛鳥、美人の聞こえ割分に達し、入内させよとありがたい勅詔」

「エ、ハア、ハツ」

とびつくり、うろくと詞は涙ぐむばかり

「オ、肝が潰れる筈。夫と申すも恐れ多い、一天の君を簪に取る家の面目、日本国にこの上のない嫁入の随一。果報な娘、この様なめでたい事があるものか。ナア女子共」

「ハイ、ハイ。おめでたいと申さうか、いつそ乱騒ぎでござります」

と工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投げ首の、二人は小腹立つて行く

母の心も色々に、咲き分けの枝差し出だし

「親の赦さぬ言ひ交はし、徒らは叱つて返らず。一旦思ひ初めた男、いつ迄も立て通すが女子の操、破

髪も改めすべらかし。祝うて母が結び直してやりまし

よ」

といそく立ち立ちは立ちながら、娘の心思ひやり、別れの櫛のはかなさも、解きほどかれぬ憂き思ひ

重き背山の庵の内、父が前に謹んで

「久我之助が心底聞こし召し分けられ、切腹御赦免下さるゝ事、身に取つていかばかり。大慶至極」

と手を付けば

黙然たる大判事

や打ちうるむ目を開き

「今朝入鹿大臣、この大判事を召し出だし、『先帝寵愛の采女、身を投げ死したりとは偽り。その方が倅久我之助、人知れぬ方へ落しやりしに極れば、必定、汝らが方に匿ひあるべし』との難題。もとより知らぬ大判事、よくよく思へば、采女の御難を避けん為、猿沢の池に入水の体にもてなして、密かに落とし参らせしは、なかく久我之助が智恵でない。鎌足公の差図を受けての計らひと、知つたは身も今日が始め。親にも隠し包みしは、大事を洩らさぬ心の金打。若輩者には神妙の仕方、ハア出かしたりと思ふに付け、邪智深き入鹿、久我之助が降参せば、命を助けん連れ来

りやとは言ぬが、貞女の立て様がありさうなもの。とつくりとよう思案しや。コレ、この花は八重一重、互ひに不和なる親々の、心揃はぬ二つの花。一つ枝に取り結び、切り放すに離されぬ悪縁の仇花。今そなたの心次第で、当時入鹿大臣の深山風に吹き散らされ、久我之助は腹、腹を切らねばならぬぞや。雛鳥と縁を切つて入鹿様へ降参すれば、清舟も命を助かる。知らせは川へ流す桜、散るか散らぬが身の納まり。時に従ふ風に靡き、君が生けの花になれば、八重も一重も恙なふ、九重の内に傳かるゝ互ひの幸ひ。恋しと思ふ久我之助、助けうと殺さうと、今の返事のたつた一つ。貞女の立て様、サア、サ、見たい」

恋も情けも弁へて、義理の柵堰き止めても涙せき上げせき上げながら

「母様、段々聞き分けました。お詞は背きませぬわいな」

「そんなら得心して入内してたもるか」

「アイ、アイ」

「オ、嬉しや、出かしやつた、出かしやつた・・・出かしやつたよな。それでこそ貞女なれ、馴れぬ雲居の宮仕へ、武家の娘と笑はれな。今日より内裏上臈の、

たれと、情けの詞は釣り寄せて、拷問に掛けん謀。

責め殺さるゝ苦しみより切腹さすれば、采女の詮議の根を断つ大功。天下の主の御為には、ナニ倅の一人など葎に生ふる草一本、引き抜くよりも些細な事と涙一滴零さぬは武士の表、子の可愛うない者がおよそ生ある者にあらうか。余り健気な子に恥ぢて、親が介錯してくれる。侍の綺羅を飾り、いかめしく横たへし大小。倅が首を切る刀とは五十年來知らざりし」

と老の悔みに

清舟も、親の慈悲心ありがた涙

「命二つあるならば、君には死して忠義を立て、父には生きて養育の、御恩を送り申さんに、今生の残念これ一つ」

と顔を見上げ

見下ろして

『ワツ』とひれ伏す親子の誠

こなたの亭には母後室

「サア、めでたい。そなたの名の雛鳥をその儘の内裏雛。装束の付け様も、この女雛と見合はせて、サアく早く」

とありければ

恨めしげに打ち守り

「女夫一対いつ迄も添ひ遂げるこそ雛の徳。思ふお人に引き離され、何樂しみの女御后、茨の絹の十二単、雛の姿も恨めし」

と取つて打ち付け縁板に

ころりと落ちし女雛の首

驚く母の胸板に必死と極まる娘の命、包めど堰き来るはらく涙

「娘、入内さすと言つたは偽り。まつこの様に首切つて、渡すのぢやわいなう」

「エ、そんならほんまに、貞女を立てさして下さりませ。ア、忝ない、ありがたい」

と伏し拝む  
手を取つて

「ノウ入内せずに死ぬるのをそれ程に嬉しがる、娘の心知らいでなうか。あつと受けても自害して、死ぬる覚悟は知りながら、そなたの死ぬる事聞いたら、思ひ合つた久我之助、共に自害召されうも知れぬ。せめて一人は助けたさ、一旦得心したにして、母が手づから解いた髪は下げ髪ぢやない、成敗の掻き上げ髪、介錯の、介錯の支度ぢやわいの。高いも卑いも姫御前の、

リヤ冥途の血脈読みさしの無量品、親が読誦する間、一生の名残り女が面、一目見てナ、なげ死なぬ」

「イ、ヤ存じも寄らず。この期に及んでさほど狼狽へた、未練な性根はござりませぬ。さりながら今際の際の御願ひ、私果実てしと聞かば、義理に繋がれ雛鳥も、共に生害と申すべし。さある時は太宰の家も断絶、暫くの間ながら、切腹の儀はお隠しなされ、降参承知致せし体に、後室方へお知らせあらば、女も得心仕り入内致せば彼が為。不義の汚名は受けたれども、これぞ色に迷はぬ潔白」

「オ、出かした、よく気が付いた。年来立て抜く武士の意地、不和な仲程義理深し。命を捨つるは天下の為、助くるは又家の為。氣遣ひせずと最期を清う。花は三吉野、侍の手本になれ」

と潔く、言へど心の乱れ咲き、あた桜の若者を散らす惜しさと不憫さと、小枝にそゞぐ血の涙、落ちて波間に流れ行く

それ共知らず悦ぶ雛鳥

「ア、アレく、花が流るゝは、嬉しや久我様のお身に恙のない証。私は冥途へ参じます。千年も万年も御無事で長生き遊ばして、未来で添うて下さんせ」

夫といふはたつた一人。穢らしい玉の輿、何の母も嬉しかる。祝言こそせね、心ばかりは久我之助が、宿の妻と思ふて死にや、ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ・・・」

「ヤア」

「アイナア」

「エ、これ程に思ふ仲、一日半時添はしもせず、賽の河原へ遣るかいの」

と引き寄せく

雛鳥も、膝に取り付き抱だき付き、忝なさと嬉しさと、逢はで別るゝ名残りの涙

一つに落つる三つ瀬川

川を隔て、清舟が、最後の観念悪びれず、焼刃直ぐなる魂の九寸五分取り直し、腹にぐつと突き立つる

「ヤレ暫く引き廻すな、覚悟の切腹急ぐ事はない。コ

と心で言ふが暇乞ひ

「思ひ置く事言ひ置く事、もう何にもござんせぬ。片時も早うサアかゝ様、切つて、切つて」

と身を惜しまぬ

わが子の覚悟に励まされ、胸を定めて取り上ぐれど、刀は鞘に錆付く如く離れ兼ねたる血筋の絆、今切り殺す雛鳥を無事と知らする返事の桜、同じく川に浮かぶれば

「ハア嬉しや。これぞ雛鳥が入内の知らせ、久我之助が心の安堵。采女の方の御在処は、最前申し上ぐる通り、この世に心残りなし。御苦労ながら御介錯」

「サアく、かゝ様、切つていの。未練にござんす母様」と泣かぬ顔するいちらしさ

刀持つ手も大盤石

思ひは同じ大判事、子よりも親の四苦八苦

命も散りく

日もちりく

「ハアさうぢや。早や西に入る日輪は娘がお迎ひ、弥陀の来迎、西方浄土へ導き給へ。南無阿弥陀仏」

と眼を閉ぢて、思ひ切たる首諸共、『ワツ』と泣く声答ゆる筈

肝に徹して大判事、刀からりと落ちたる障子

「ヤア、雛鳥が首討つたか」

「久我殿は腹切つてか」

「ハア・・・」

「しなしたり」

とどぶど座し

悔やむも泣くも一時に、呆れて詞も

なかりしが

やゝあつて定高声を上げ

「入鹿大臣へ差し上ぐる雛鳥が首、御検使受け取り下され」

と呼ばゝる声を吹き送る、風の案内に大判事、嘆きの姿改めて、衣紋繕ひしづく〜と降り立つ川辺の柳腰、娘の首を掻き抱き

「大判事様、分けては何も申しませぬ。御子息の御命はどうぞと思つた甲斐もない、あへない有様。お前様のお心も推量致してをります。添ふに添はれぬ悪縁を、思ひ合つたが互ひの因果。この方の娘も添ひたい〜と思ひ死に。余り不憫に存じます。せめて久我之助殿の息ある内に、この首をその方へお渡し申すが、娘を嫁入さす心」

「実に尤も。嫁は大和、賀は紀伊国。妹背の山の中に

落つる吉野の川の水盃、桜の林の大島台。めでたう祝言さしませうわい」

「そんならこれまでの心も解けて」

「ハテ互ひにあいやけ同士」

「エゝない」

と悦ぶも後の祭り

「ほんに背丈伸びた者を、いつ迄も子供のように思つて暮らすは親の習ひ。あまやかした雛の道具、一人子を殺して何にせう。後に置く程涙の種。腰元共、その一式残らず川へ流れ灌頂」

一世一度の贈り物

五丁七丁続く程、美々しうせんと楽しみに

思つた事は引きかへて、水になつたる水葬礼

大名の子の嫁入に、乗物さへもなか〜に

形見も仇の爪琴に

首取り乗せる弘誓の船、あなたの岸より

かの岸に流るゝ血汐清舟が

今際の顔ばせ見る親の、口に祝言心の称名

「千秋万歳の千箱の玉の緒も切れて、今はあへなき」

の死顔、生てある内この様に賀よ嫁よと言ふならば、

いかばかり悦ばんに、領分の遺恨より意地に意地を立て通す、その上重なる入鹿の疑ひ。仲直るにも直られぬ、義理になつたが二人が不運。あれ程思ひ詰めた嫁、

何の入鹿に従はう。とても死なねばならぬ子供、一時

に殺したは、未来で早う添はしてやりたさ。言ひ合は

さねど後室にも、これまで不和な大判事をあいやけと

思し召さばこそ、倅に立てゝ一人の娘。ア、よくぞお

手に掛けられし、コレ〜、コレ過分に存ずる定高殿」

「ア、勿体ない、そのお礼はあちらこちら。不束な

娘故大事のお子を御切腹。器量筋目も勝れた殿御、夫

に持つた果報者、とは言ひながら、あれ程迄手塩に掛

けて育てた子を又手に掛けて切る心」

「サ、推量致してをる。武士の覚悟は常ながら、ま

さかの時は取り乱し、介錯し後れ面目ない」

「イエ〜、それでめでたいこの祝言。これがほんの

葬よ嫁入、一代一度の祝言に賀殿の無紋の上下」

「首ばかりの嫁御寮に、対面せうとは知らなんだ」

「それも子供が通れぬ寿命」

「兎にも角にも世の中の、子といふ文字に死の声の」

「あるも定まる宿業」

と隔つる心親々の、積もる思ひの山々は

解けて流れて吉野川、いと〜漲るばかりなり

涙払うて大判事、首掻き上げて声高く

「倅清舟承れ。人間最期の一念によつて輪廻の生を

引くとかや。忠義に死する汝が魂魄、君父の影身に付

き添うて、朝敵退治の勝軍、草葉の影より見物せよ。

今雛鳥と改めて親が赦して尽未来、五百生迄変らぬ

夫婦。忠臣貞女の操を立て、死したる者と高声に、

閻魔の庁を名乗つて通れ。南無成仏得脱」

と唱ふる声の聞こえてや、物得言はねど合はず手を、合

はせ兼ねたるこの世の別れ

早や日も暮れて人顔も見えず庵の霧隠れ

埋む娘の亡骸は、こなたの山に留まれど

首は背山に検使の役目

わが子の介錯涙の雛、よしや世の中憂き事は、いつか当

麻の

大和路や

後に妹山

先立つ背山

恩愛義理を堰き下す

涙の川瀬

井戸替の段

「引いたりやく引いたりやな」

「オ、」

「引いたりやな」

「オ、」

文月七日例年の水を新井に繰り返す、釣瓶の綱も三輪の里

酒商売の世過ぎ屋が、身過ぎの水の内井戸を、わけて祝ひの賑はしき

「サア、く済んだ」

と取りくくに、神酒洗ひ米供へ物、皆々汗を入れにけり  
主の母は納戸より運ぶ用意の酒肴、いつにないほや

く機嫌

「近所の衆、どなたも大儀でござんした。嘉例の通り酒盛して、暮れるまでゆつくりと遊んで去んで下さんせ。コレ土左衛門さん、年當にお前から酒始めて下さんせ」

「ア、又雑作なよしにさんせいで。おいらが相貸屋で

手伝ふのも、年中この井戸の水を使ふ恩返しぢや。

ノウ五洲兵衛、さうぢやないか」

「オ、さうともく。気を張つてもろてはいかう術ない。これからはいつもの通り、賑かに遊びましょ。サア野平、藤六、騒ごぞやく。ほんにそれはさうとコレかみさん、見ればこゝにも寺屋の様に七夕様が祭つてあるな」

「サイノ、マア見て下さんせ。愛たてないと思はんしよが、こちの娘のアノお三輪、何やら星様に願があるとして、あの様に内で祭りも色々の供へ物。ハ、ませた世界ぢやないかいな」

「ホ、そりやマア奇特なこつちや。そしてこのお娘は留守かえ」

「アイ、小さい時往た寺子屋へ七夕に呼ばれました。サア、く一つ呑んで下さんせ。ヤイ子太郎、酌をしをらぬか。どりや吸物に豆腐でも炊いて来ましょ」

と母親は、納戸へ入れば

打ちくつるぎ、廻る盃底なし共、引き受けく一気呑み、肴の鉢を引き寄せて、箸離さずの滅多喰ひ

丁稚の子太郎呆れ顔

「ア、てさて気味のよいとは挨拶ぢや。余程下作な呑

み様ぢや。井戸の鯛が水呑む様に、口開いてがつぽがぽ、がつぽがぽ。エ、それでは味が知れにくかる。コレこの酒はかみさんが張り込んで、こちの銘酒の第一番、男山といふ酒ぢやが、こなはん達はほんの無茶呑み。この銚子の代り目から、もう鬼殺しにしてくれう。そしてマアよい加減に酒呑まんしたら、いつもの通り騒ごかい。こちのお三輪さんの三味線と太鼓も借つて置いた」

「おつと合点」

と口利きの、土左衛門が眉に皺

「それはさうぢやが、この隣りへ近頃来た相貸屋の烏帽子折、この井戸替へにも立ち合はず、あんまりなめた奴ぢやないか。野平なんと思やるぞ」

「ア、ソレ、く生じらけた顔付きで、馬鹿慥な生まれ付き。平生抜かす挨拶も、モ子細らしい切口上、毛唐人の様な奴。大方ソレ、今流行る早学文といふ本を見て、唐のはめ句をしをるのぢや。この井戸替へにも出合はぬからは、きつと物言ひ付けてやる」

と貸屋の内の神様達、御託宣も取りくくに

それとも知らずのつしのし、帰る隣りの烏帽子折、辛き世渡り甘口に羊羹色の黒小袖、一腰差した取りなりに、

浪人とこそ知られける  
門口より腰屈め

「隣家にをります其原求馬でござります。お屋敷方の用事につき、未明より罷り出で只今帰宿仕る。後室様にはいよく御機嫌麗しうござりませう。後刻ゆるりと御意得ませう」

とわが家へ入るを  
惣々が

「ア、これくくくく、マア待たんせ。今日はコレこゝの井戸替へ。相貸屋が寄つてゐるのに、こなさんばかり来ずにあて、付き合ひが済むのかい。エ、たゞしおいらを潰すのか」  
とねだり台詞に

求馬はびつくり、上り口に両手を付き

「これはく、お顔を見れば皆合壁かっぺきのお方々。これの井戸替へお手伝ひ、かつ以て私存せず。これと申すも不案内から、先格の作法を存せず。段々の失礼真平御赦免下され」

と畳に額擦り付くる

「ア、これく、また子細らしい事は言はんすかいの。ハテ勝手を知らにやしよことがない。了簡せいならそ

れで済む。こちらも一言言ふた後は、モウいざいざはないわいの。この土左衛門が呑み込んだ、ア、呑み込んだ」

「しからばあなた様がお取り成しで、か様の御教訓なされた上は、そのいざいざとやら申す御遺恨はござりませぬか」

「サアもうよい、言はんすなく、ウイ、ア、ア。さておいらは余程酔うてゐる。これからは嘉例かれいの騒ぎぢや。調子が合はいで面白ない。サアくこの石できゅつとやらんせ」

「ハ、忝なうはござりますが、私一滴もたべませぬ」

「オツトそしたら勝手次第ぢや。サ、サアくこれから騒ぎの趣向。この土左衛門に烏帽子屋殿、五洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大踊り。三味線太鼓は野平、藤六、よいかく。求馬さんも合点か」

「スリヤ私にもその踊りを」

「オイノ。こなはんはこの貸屋での新面あらめん、猶踊らにやならぬわい。音頭も俺が二役ぢや。サ、サ、よいかく。やるで、やるでく。ヤア千代の始めのひと踊り、まづは松坂越えたえ。踊りはありやく、ハツハ、ヨイヤサ」

烏帽子屋殿はもちくと、手持ち不沙汰に揉み烏帽子

「ヤツトサ」

「ヨイく」

「こゝの娘の柳さび、引き立て烏帽子と折りかけた、ヤツトサ」

「ヨイく」

「風折烏帽子見すまして、帆かけ烏帽子と帰らるゝ、ヤツトサ」

「ヨイく」

家主茂次兵衛いつきせき

「ア、コリヤ、コリヤく、いかに嘉例の祝ひでも、余り騒ぎが嵩高かまたかな。ちと静かにせんかい。コリヤ喧しいわな、ちと静かにせんかい。コリヤヤイ。ヤンヤラヤイノヤイ」

茂次兵衛叶はず共々に、叱る詞も拍子づき

「アソレ、ヤツトサ」

「ヨイく」

「この家主を袖にして、酒を呑めとも言はゞこそ。アソレ、ヤツトサ」

「ヨイく」

「おのれらばつかり呑み喰らひ、近所を構はず大騒ぎ。

アソレ、ヤツトサ」

「ヨイく」

「これ程言ふても聞き入れにや、家明け付けるが合点か」

「オ、サ合点ぢや、お家主渡した」

と踊り拍子の酔ひ機嫌、夢中になつて立ち帰る

後に家主たゞ一人、振り残されてグニヤとなり

「ア、しんど、ア、しんど。コリヤ子太郎よ、わりやマア心持ちはどんなもんどぢや」

「ア、イヤモ、心持ちはあんころもつちや」

「エ、何言ふぞい。時に子太郎、俺は貴様に内々ひななで頼まにやならぬ事がある。マアくこゝへ」

と小声になり

「門の戸は開けてある。見る人も聞く人もたんとある。

さてマアこゝのお娘は器量好し、あんなお娘とコレマ添ぞひ臥ぶしの、身は家主の阿呆ぞと、月夜も闇夜も無茶苦茶に、色をせうとてお姿を、見るとガタく胸震むねふるひ。魂抜けて中風病ちゆうふうびょうみ、よう利く惚れ薬があるならば、

百とこ買うて来ておくれ」

と子太郎傍に引き寄せて、拝み頼むぞ阿呆らしき

「ム、そんならこちのお三輪はんに御執心でござりま

すか」

と問はれて猶も、髭むちや顔

「余所の男はいさ知らず、家主のあられもない。お三輪に惚れたといふ事が、嘘偽りに言はれうか」

「ムウ、そんならそのお詞に違ひなくば、なんぞ確かな頼みの印。それ見た上でへ、お仲立ち」

「エ、そりや何抜かすのぢや。肝腎の用を忘れた。エ、婆さん内にか、逢ひたい」

と言ふ声

聞いて納戸より

「オ、これはマアお家主様か。ヤイ子太郎め、あなたがお出でなされたら、なぜおれに知らしをらぬ」

「エ、何言はんすやら。アノお家主様も今まで同じ様に、踊つてゐあつたもの」

「エ、またづけくと何言ひをる。サアく申し、なんぞ御用でござりますか」

「オ、用ともく大事の用。エ、さるお侍から頼まれたが、入鹿様の言ひ付けで、ソレ鎌足といふ和郎の息子の淡海、方々と流浪してゐるげな。それを見付けたら大金、なんでもマアこちへござれ。とつくりと言ふて聞かそ。サ、ちやつとござれ、ちやつと、ちやつと

子太郎は不審顔、隣りの門口耳を当て、聞きすまして立ち戻り

「なんでも隣りの烏帽子めは、俺とは違つて余程えらい色事師ぢやわい。あいつが見事な烏帽子で、あの代物を占めをると聞こえた。こちのお娘に聞かせたら、大抵の事ぢやあるまい。エ、箸早い奴ではある」

とつぶやくところへ

娘のお三輪、寺子屋戻り足早に、門口這入れば

「ヤアお三輪さん戻らんしたか。サアく事ぢやく大事ぢやく」

「オ、あの人わいの。なんぢやわいの、わしにびつくりさしやつたわいの」

「さしやつたわいの、エ、さしやつたわいのどころかいの。コレ、お前に忠義を言つて聞かす忠義を」

「忠義とは何の事ぢやわいの」

「エ、忠義とはそれ、忠臣の事ぢやわいの」

「サアその忠臣は知つてゐるがの。それがどうぞしたかや」

「サアその忠臣はの、あの隣りの烏帽子めがな」

「隣りの烏帽子とは、求馬さんの事かいの」

「オ、求馬々々。その求馬の姿から起つた事。こちの

く」

「ハイ、ハイく、そしたらお前へ参りましょ。ヤイく子太郎よ、サア忙がしうなつて来た、忙がしうなつて来た。もう日が暮れたさうな。火も消して店開けい。用心に気を付けい。又この娘は寺屋から戻りが遅い。ソレ酒買ひが来たら叩き出せ。盗人が来たら酒計つてやりをれ」

と気の急ぐ儘に間違ひだらけ、打ち連れ

### 杉酒屋の段

てこそ出で、行く

日と共に當む様も入相の、四方の市倉戸鎖し時

子太郎後を打ち見やり、灯を上げ表の戸、夜の構へのそここ」と

こなたの道より歩み寄る、振りの袖の香やごとなき、面を隠す衣被き、誰白絹のやさ姿

窺ふ内に隣りの軒、知らせのしはぶき、主の求馬

「今宵はどうして早かりし。サアくこちへ」

とその後、言はず語らず手を取つて、戸口立て寄せ入る後に

かみさんは家主殿へ用があつて往かしやつた。その後へなんぢや知らぬが、真白な絹を被き幽霊かと思ふたら、美しい銜妻が隣りの門口、ヤことくくと叩いた。そしたら求馬はんがつと出て、『よう早う来たな』と手に手を取つて内へ這入つた。ナントお三輪さん、こりや黙つてはゐられまいがな」

「ム、なんと言やる。求馬さんの所へ美しい女中さんが見えて、その女中さんを連れ立つて、這入らしやんしたと言やるのか」

「アイ」

「そりやマア合点のいかぬ事。幸ひかゝさんも留守なれば、そなた往て求馬さんをこへ連れて戻つてたも」

「オツト合点呑み込んだ」

と走り出で、隣りの門、破れるばかりに打ち叩き

「コレ求馬はん、隣りの酒屋から使ひに来た。今のが済んだらソレ、印判持つてござんせ」

と口から出次第

求馬はびつくり何やらんと、立ち出づれば物をも言はず

「マアくこちへ」

と無理矢理に、手を引き連れてわが家の内

それと見るより娘のお三輪、口に言はねど赤らむ顔

「求馬さん、お帰りなされたか」

「これはくお三輪さん、寺屋へお出でなさつたげな」と互ひに味な墨付きを

子太郎が引取つて

「サア俺が役はもうこれまで。そこに何かの立て引きさんせ。こゝらでわれら粹を通し、夜食の扶持にあり付かう。兩人共、エヘン、そも後に逢はう」

と納戸へ走り入りにける

後に二人は接穂なく

おぼこ育ちの娘気に、思ひ詰めたる一筋を、言はうとすれば胸迫り

「今子太郎に聞いたれば、美しい女中さんが宵からお前へ来てぢやげな。定めてそれは隠し妻、これまでお前と私が仲、逢ふ事さへも偶々に、千年も万年も変らぬ契りと仰つた。その約束は偽りか、浮世の訳も弁へぬ。在所育ちの私でも、言ひ交した事忘れはせぬ。あんまりむごい」

と取り付いて、涙先立つ恨み言

「これは思ひも寄らぬ疑ひ。成程、女中は来てゐるが、あれはソレ春日の神子殿。その連れ合ひの禰宜殿の鳥

帽子を誂へに見えたのぢや。美女はおるか、いかな天女が影向あつても他へ散る心はない。和歌三神を誓ひに掛け、偽りは申さぬ」

と時の間に合ひ落ち付かせば  
さすがおぼこの解けやすく

「神様まで誓言に、それで私も落ち付いた。必ず變つて下さんすな」

と立ち上つて七夕に、供へ祭りし二つの苧環、持ち出でゝ前に置き

「私が寺屋へ往た時にお師匠様に聞いておいた。殿御の心の変らぬ様に、星様を祈るには白い糸、赤い糸、苧環に針を付け、結び合はせて祭るとやら」

「オ、それがすなはち願ひの糸の乞巧針」

「ム、お前もよう知つてぢやな。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それで私もこの願籠め、寺屋で見た本の中に心を掛けし女子の歌。ア、なんとやら、オ、それよ、恋ひ渡る思ひは千々に結ばれて、幾夜願ひの糸の苧環」

「ホ、その男の返しには、逢ひ見ての後も願ひの糸筋を、余所へ乱すな君が苧環」

「アイくさうでござんした。いつまでも変らぬ印、

と問はれて

求馬は答へもなく、うぢつく素振り

見て取るお三輪

「ア、申し、コレ神子さんとやらいふ女中さん、人をマアお端女かのなんと、ひっこなした物の言ひ様。求馬さんにはアイ、私が用がたあんどござんす。お前の世話にはなるまいし、構うて下さんすな」

と内へ入る

「オ、これははしたくない。その様に言はしやつても、そもじなどの用を聞く、求馬さんぢやないわいなう。サアお帰り」

と手を取れば

お三輪が隔てゝ

「イエくく私がまだ用がある。去なす事はなりませぬ」

「イ、ヤ、こゝには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しや」

と手を引立てゝ立ち出づれば

「イヤ放さじ」

とお三輪もまた、あなたへ引けば

こなたへ引く、訳も渚にたはれる雁

翼振袖振り分け姿、恋を争ふその折から

「ア、イヤ、これはこの酒屋の娘御」  
「そのマア隣りの娘御と、最前から久しい間、何の用がござりました」

いきせき戻るこの家の母

「ヤ求馬殿、こなさんには用がある。どこへも遣る事ならぬ。動くまいぞ」

と身構へに

何かは知らず白絹の、姫は外へと出で行くを

止める求馬に

また絶る、娘を

押し分け母親は、求馬遣らじと引き留め

繋ぐ手と手を柵の、風に揉まるゝ争ひに

子太郎立ち出で見廻して、これ幸ひと母親の帯にしつくり括つたる、縄先桶の呑み口に、結び付け納戸へ逃げて入る

こなたは互ひに恋ひ慕ひ、姿乱るゝ姫百合の、手を振り切れば一時に

乱れて走るを

母親が、遣らじと追へば

繋ぎ縄、力む拍手に呑み口抜け

酒は滝津瀬びつくり敗亡

三人門へ遅れじと、同じ思ひを後や先道を慕つて

### 道行恋芋環

岩戸隠れし神様は、誰とねゝして常闇の、夜々毎に通

ひては、また帰るさの

道もせ気もせそれも何故恋故に

寝るゝ所体恥かしと

面影隠す薄衣に、包めど香り橘姫、思はぬ人を思ひ住ひ、

心のたけを口説けども

つれなき松の下紅葉、焦がれて絶へん玉の緒も、殿故ならば捨て草も

暫しは憩ふ芝村の、釜が口をも出離れて、歩むに

暗き呉竹の、茂れる中をちらくくくと、見へつ隠れつ帰るさの

後を求馬が慕ひ来て

互ひにはたと行き合ひの、星の光に

顔と

顔

「ヤア恋人か何故に、こゝまで後を追ひ鳥は、もしや時ねぐらの契りをも、叶へてやるとのお心かと、胸には言へど詞には、おもはゆ振りの袖几帳そでまじやう」

「成程切なる心ざし、仇に思はじさりながら、さほど焦がるゝ恋路にて、昼をば何と鳥羽玉の夜ばかりなる通ひ路は、いと不審なり名所を、聞いたる上はこなたより、二世の固めは願ふ事、あかさせ給へ」とひたすらに

「問はれて実にも恥かしの、洩りて余れる浮き身の上、語るにつらき葛城の、峰の白雲あるぞとも、定かならざる賤の女と、思うて深い疑ひの、雲を晴らして自らが思ひも晴らして給はらば、どんな仰せも背くまい。たとへ草葉の露霜と、消えても何の厭やせぬ。これ程思ふに胴慾な、解けぬお前のお心は、あんまり結ぶの神様を、祈り過ごした咎めかや。つれなの君や」と恨み詫び

思ひ乱るゝ薄蔭、それとお三輪は走り寄り、中を隔てゝ

立ち柳

立ち退く袂

引き留め

「エ、聞えませぬ求馬さん、ソリヤ気の多い悪性な。そもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過ぎし夜に、葉越しの月の面影は、お公家さんやら侍さんやら、知れぬ形振りすつきりと、水際の立つ好い男。外の女子

恋の柵しがらみ葛つた、付き纏たがひはれてくるくく  
廻るや三つの小車の、花より白む横雲の、たなびき渡り  
ありくと、三笠の山も程近く

鳴る鐘の音に驚く姫

帰る所はいづくぞと、求馬が氣転振袖の、端に縫うてふ  
取り交はす

縁の芋環いとしきの、余りて三輪も愠いん氣の針

男の裾に付けるとも、知らず印の糸筋を慕ひ、慕うて

### 饜ふかし七上使の段

栄うる花も時しあれば、すがり嵐のあるぞとは、いさ  
白雲の高御座

新たに造る玉殿は、かの唐国の阿房殿、こゝに移して三

笠山、月も入鹿が威光には、覆はれまずぞ是非なけれ

腋門の方より宮越玄蕃

荒卷弥藤次

御前よきまゝ高う吹く、帆掛け烏帽子も十分に、のけぞ  
り返り入り来たり

「ホ、ウ仕丁共、朝清めな。イヤなに玄蕃殿、この度  
新たに築かれたるこの山御殿、朝日に輝くところは吉  
野龍田の花紅葉、一度に見るとも及びますまい」

「何さく。イヤモ言語に述べ難き御物好き、瑪瑙の  
梁、珊瑚の柱、水晶の御簾、瑠璃の障子。コレ見ら  
れよ、飛石は琥珀、砂は金銀、また釣殿に登り見お  
るせば、春日の杉も前栽の草ひら、若草山、葛籠山は  
撒石同然。猿沢の池はお庭の井戸に見えまする」  
と話の尾に付く仕丁共

「ア、結構な御普請でございます。さうして何やら

ぶつくくと好い匂ひが致します」

「オ、その筈く。縁板、檻に至るまで皆伽羅と沈

「したり、抹香や鉤屑とは違つた物ぢや、ノウ又次

「さいのう、お学問所は唐を写して唐木ぢやげなの」

「ホオ、その唐木とは何々ぞ」

「オ、まづ花梨」

「フン」

「紫檀」

「フン」

「黒檀」

「ホイ」

「鉄刀木」

「ホイ」

「うらやさん」

「ホイ」

「当卦本卦」

「ヤア」

「手の筋」

「ヤア」

「男女相性」

「ヤア」

「墨色の考へ」

「コレく」

「失せ物待ち人」

「コレ、コレく」

「書判の善悪」

「ア、コレく、そりや山御殿ではなうて山伏ぢやぞ

や」

「サア、王様もこの山で寝やしやるによつて、山伏ぢ  
や」

「エ、人を嘲弄するがな」

「イヤ、長老とは坊主の事か」

「イヤ、女子の事ぢや」

「そりや女郎ぢや」

「イヤ、如露とは花に水かける物ぢや」

「エ、どう言やかう言ふと、なんぼ貴様がくずなの  
弁でも、俺にや敵はぬ」

「ヤイ、富楼那の弁ぢや。くずなどは魚ぢやわい」

「イヤ、くずなぢや」

「イヤく、ふるなぢや」

「くずなぢや」

「ふるなぢや」

「くずなぢや」

「ふるなぢや」

「くずなぢや」

「ふるなぢや」

「ヤイ／＼騒がしい、そりや何事。清めしまはゞ早く下され。皆行け、行け」

と追立てやり

「あれを聞きあれ弥藤次殿、わが君この殿へ御移りと見え、物の音近く聞こえ申す」

「いかさま左様」

と威儀繕ひ、嚴重

にこそ控へゐる

花に暮らし月に明かし、酒池の遊びに酔ひ疲れ、御

殿々々の通ひ路も、数多の官女が道楽に、君の機嫌を鳥兜、調ぶる笛や笙、箏、大鼓の音も鶏徳に、己が不徳を押し登る、纏纏の深縁、蜀錦の褥の上、むんずと座せし有様は、実に類ひなき栄華の殿

玄蕃、弥藤次頭を下げ

「先だつて卿相雲客達より、君の寿を祝し申されし数の島台。ソレ女中方、歡覧に供へられよ」

「アツ」

と答へて持ち出づる、思ひ／＼の飾り物

「何がな君が寿を祝ふ鶴亀松竹の影は千尋の深縁、松と鶴亀合はせて見れば、一万二千の齡を君に、譲り寿ぐ蓬萊山。さてまた次の島台は、周の帝の思ひ者、仮りの情けの弟草、実に寵愛の色菊や、葉毎を染めしその筆の命毛長き八百歳。老いせぬや／＼、葉の名をも菊の酒、酌めども尽きぬ泉の壺。殿上人の方々より御祝儀なり」

と相述ぶる

一入興に入鹿が悦び

「ホ、百司百官より下万民に至るまで、わが在位長かれと願ふ事、銘々が身の冥加なれば、猶万歳を唱へよ」と高慢我慢の詔

『ハツ』と兩人階下にひれ伏し

「我々は申すに及ばず、民百姓も野に手を打つて舞ひ楽しむ。誠に閉ざぬ御代と申すは、今この時に候ふ」と滅多に追従 猩々々の、人形に見惚れ官女達

「コレ／＼この猩々が手に持った酌盃も取り外し、壺には真の神酒を湛へた。これで御酒宴始めうか」

「いかさま、それはよい御慰み。サア／＼早う」

と取り／＼に、手まづ遮る盃の廻れや／＼、万代も尽きじ尽きせぬ歡樂の、興を催すその所へ

「物申、頼みませう」

とどつてう声、撥鬢頭の大男、御殿間近くぼつかほか／＼、着たる木綿の長袴、糊しやきばつて立ちはたかり

「エ、入鹿どんはこぢやな。内になら逢はして下んせ」

と木で鼻くゝるむくつけ詞

宮越

荒巻目に角立て

「ヤア何奴なれば君の御前とも憚らぬ馬鹿者め。すきりをらう」

と極め付くる

「ア、イヤ、俺や難波の浦の鱧七といふ網引きでござすが、いつやらからこちの方へ、宿替へしてござんしたお公家どん。鎌きりの大身から、雇はれて来た使ひでござんす」

と言ふ

遙かに見下ろす入鹿

「ア心得ぬ、その鎌足め。首陽山の昔を学び、後を隠せしと聞きしに、さては難波の浦にありけるよな。普

と刀の下げ緒にぶら／＼と結びし徳利にきつと目を付け

「未だ日本へ渡らぬ兵器、唐土にありと聞く、飛び道具の類なるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。方々、油断致すな」

と眉を顰めて身構へたり

「エ、とつけもない。とつくりと見やんせ。酒ぢや／＼。コレそこなお手代衆、早うコレ、それ進せさんせ」

「イ、ヤ善悪知れざる鎌足より差し上げし酒ならば、毒薬仕込みあらんも知れず。奉る事罷りならぬ」

「エ、イ廻すわく。ドレ俺が毒味してやる。茶碗はないかえ。そんなら赦さんせ。直やりぢや」

と言ひつゝ徳利の口から口

「オ、良い酒ぢやになあ。これを飲まぬといふ事が、あるかしらぬ」

と振つて見て

「ヤア南無三、皆飲んでしもうた。ひよんな事してのけた。コレ、ひよつと鎌どんに逢はんしよとまゝよ。俺が飲んだと言はずに、よう届いたと礼言ふて下んせ

や」

と我武者な様でも正直者、真面目になつて気の毒顔

「ア、まだ何やら言伝つて来たが、落しはせぬか」

と懐探し

「オツトあるわく。サこれ見やんせ」

と一通を、渡せば

弥藤次押し披き

「ナニく、われ不肖たるによつて、暫く心を惑はすといへども、今一天四海御手の内に落ち入る事、正しく天の譲り給ふ万乗の御位。入鹿公に背くは天に背く

と同じと先非を悔いて、こゝに降参を乞ふものなり。

今より臣下に属するの印、君の齡を東方朔に例へ、

この桃花酒を以て御寿を祝し奉る。内大臣藤原の鎌足、謹んで申す」

と読み上ぐる

「ハ、なまくら者の鎌足め。臣下とならんなんど、はイ、ヤしらくしき偽り奴」

「なんぢや、鎌どんを嘘つきとは、何ぞ確かな証拠がごんすか」

「ヤア小ざかしき証拠呼ばゝり。彼が心腹言ふて聞かさう」

「ドレ、聞きませうか」

「まづこの入鹿を東方朔に譬へたるが野心の証跡」

「そりや又なじよに」

「ホ、昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度実の成る桃を、三度盗んで喰らひし故、九千年の齡を保つ。桃に百の縁をかたどり、百數百官を手に入れし入鹿を、盗人なりといはぬばかりの底巧み。憎

い奴」

と居高

「ア、イヤく、そりや無理ぢや、無理ぢやく」

とやり込むれば

邪智の入鹿も苦笑ひ

「ア口賢く言ひ曲げしな。うい奴、でかいた。その褒美には鎌足が実否を正すまで、おのれは人質。最早や籠中の鳥同然。帰る事はならぬと思へ。ヤアく、玄蕃、弥藤次、いざ萩殿にて天盃を廻らさん。来たれやう」

と引き連れて、帳台深く入りにつけり

「ア、コレく、俺を質に取らしやると、着る物や道具と違つて代物が飯喰ふぞや飯を。しかしあの業腹では大抵で喰はしをるまい。ムウ、空腹に今の酒で余程酔ひが来たわい。ドリヤ何処でなと一寝入り、やつてこまそ」

と押し上がり

「ア、腰が重い筈よこの大小。埒もないものを差さしておこして、あた面倒な」

と縁板へぐわたりと鳴るは

合図かと、突き出す槍は篠薄

構はずこり肘枕、不敵なりける男なり

御所より外へ咲き出でぬ、若き御達が入り代はり、男見に来る愛想には、お茶よお菓子よ、煙草盆、銚子土器持

「ヤアうず虫め。何を知つて小癩奴」

「ア、イヤ、何にも知らんけど、代りになつて来た俺ぢやによつて、一番言ふのぢや」

「ムウ、鎌足が代りならば、これをも代りに試みよ」

と傍なる島台押取つて、眉間へはつしと打ち付くる

台は微塵に飛び散れど

びくとも動かず

「エ、好い加減に、だゞけさしやれ。その厄払ひの代物、東方朔とやらに譬へたと言つて業わかすのか。年にあやからんせ、とこそ書いておこさしやつたれ、盗人と書いちやないぞや。それにそつちから、色々の講釈を付けて盗人詮索。知つた同士は涼しいとやらで、盗人の覚えがあるかして、今の投げ打ち。ア、こなんは正直な人さんぢや、と世間の噂。見ると聞くので大きな違ひ。マアそんな盗人と鎌どんを、懇ろには俺がさすまいわいの。仁体にも似合はぬ事をさんすの。よもやさうぢやあるまいがの。但し覚えがごんすか、ヤさうかいの」

と文盲だらけも理屈は理屈

「どうぢやいの、どうぢやいのく、どうぢやいの。どうぢやいの」

つて出で

「コレそな人は何御用で、お召し寄せありしは知らねど、さぞ待ち久しう気も尽きよう。九献一つ」

と差し置けば

体寝返り腹這ひに、頬杖つくくく打ち眺め

「ムウ、貴様達は誰ぢや」

「オ、我々は上様の身近く召さるゝ女子共」

「何ぢや短い女子ぢや。ドレ、ドレく、立ってみたい

く。成程、どれもこれも煮え込んだもんぢやのハ、。わいらはこゝな飯焚ぢやな。テモ稀有な前垂してゐるな」

「エ、つがもないざればみごと。わしらを問やるそなたの名は」

「ムウ鱧」

「ナニ鱧とは」

「ハテ、商売の夜網に出りや、沖でも磯でも行き当りによう寝る故に、鱧七といふ漁師々々」

「ヤア料紙とは、何ぞ書いてたものか。それならば必ず絵や歌は嫌ぢやぞや。今難波津で持て囃す。歌舞伎芝居の中でも、よう聞き及うだ文七や八蔵の、紋ならば書いて欲しい」

としどもなき

桜の局すり寄つて

「さうして下々も、皆そなたの様な男かや。よい男もたんとあるである。地下の女子は羨ましい、芝居は見次第、好い男は持ち次第。ほんに又この御所女子には何がなる。見るもく冠装束窮屈で、急な逢瀬のその場でも、衣紋の紐よ上帯よ、解くかほどくか、大抵では下紐迄は手が届かず、ついその内には花に風、月に叢雲障りが出来て、本意ない別れをするわいの」

と言ふさへ顔に紅葉の局

「中将や少将あたりで恋すれば、あの老懸が邪魔になり、尻目づかいは出来ぬく。その上愠気諍ひも、こつちからは檜扇で、叩けばあつちは笏で留め、つぱりかえつていきつたばつかり、いらうても見ぬ逆鉾の、雫情けも受けて見ず。辛気々々で暮らそより、いつその事に玉の緒も、絶えなば絶えたがましである。もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」

と鱧七に、ひとと二人は抱き付く

びつくり敗亡業煮やし

「エ、けたいな術妻めら。あつちへきりく失せあがれ」

とけんもほろゝに言ひ散らされ

「さつてもすげない恋知らず、玉の盃底抜け男、不骨者よ」

と不興して、本意なく奥へ入りにけり

辺り見廻はし長柄の酒、庭の千草にさらくゝと漣ぎかくれば

忽ちに、葉立ち変じて枯れ萎む

「ハ、ハ、最後の槍といひ、またぞろやこの毒酒。ハ

レヤレきつい用心」

と猶打ち見遣る庭先へ

弓と矢つがひばらくゝ、押取り囲ませ宮越玄蕃

「いかにしても心得ぬ面魂、尋ね問ふべき子細あれば、引立て来よとの論言なるぞ。早く参れ」

「ム、呼びにこんせいでも行くのぢや。仮初めにもび

こゝくと、ちよつとでも触るが否、腰骨踏み折り疝気

の虫と生き別れさすぞよ。ヤアコレ家来共さん、わり

様達もその鳥威し放すが最後、取掴まへて首引き抜き、片端からぬたにするぞ。どりや、俺から先へ行きやん

「しよ」  
と事とも思はぬ大胆者、胸の強弓矢襖を引き開け

としどもなき

「さうして下々も、皆そなたの様な男かや。よい男も

たんとあるである。地下の女子は羨ましい、芝居は見

次第、好い男は持ち次第。ほんに又この御所女子には

何がなる。見るもく冠装束窮屈で、急な逢瀬のその

場でも、衣紋の紐よ上帯よ、解くかほどくか、大抵で

は下紐迄は手が届かず、ついその内には花に風、月に

叢雲障りが出来て、本意ない別れをするわいの」

と言ふさへ顔に紅葉の局

「中将や少将あたりで恋すれば、あの老懸が邪魔にな

り、尻目づかいは出来ぬく。その上愠気諍ひも、

こつちからは檜扇で、叩けばあつちは笏で留め、つ

ぱりかえつていきつたばつかり、いらうても見ぬ逆鉾

の、雫情けも受けて見ず。辛気々々で暮らそより、

いつその事に玉の緒も、絶えなば絶えたがましである。

もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」

と鱧七に、ひとと二人は抱き付く

びつくり敗亡業煮やし

「エ、けたいな術妻めら。あつちへきりく失せあがれ」

## 姫戻りの段

てこそ入りにける

されば恋する身ぞ辛や、出づるも入るも忍ぶ草、露踏み分けて橋姫、すこく帰る対の屋の、障子にばらり打つ

礫

「ソリヤお帰りの知らせぞ」

と銘々庭に集ひ降り

枝折開いて入れ参らせ

「おいとしやく、御所のお庭の内さへも、つひにお

拾ひなされぬに、恋なればこそ歩行裸足、さぞ朝露で

お裾も濡れん。小桂に召させ代へん」

と立ち寄つて

「ヤア、お振袖に付いてあるこの紅の糸不審」

と手繰り手操れば

くるくくと、糸に寄る身はさゝがにの、雲居の庭へ引か

れ来る、主はゆかしの

「ヤア求馬様か、ハア、ハツ」

と驚く姫よりも

騒ぎさめく局達

「さつても見事引き寄せた、七年物の恋人様か。よう

こそお入り遊ばした。サア／＼こちへ」  
と手を取れば

「ア、イヤ、手前はつい道通り。この芋環を拾ひ上げるや否、滅多に引かれ参つた者。何にも存ぜぬ、お赦し」

と出づる向ふを

立ち塞ぎ

「エ、手の悪いなされ様。私らに御遠慮は内々のお話なら、どりやお次へ」

と立つて行く

姫はとかうの詞なく

差し俯いて思案の求馬

「ムウ、この御所の姫とあれば聞くに及ばず。入鹿の妹橘殿」

と言はれて

『ハツ』と胸迫り

「入鹿が妹と知り給はゞ、よもお情けはあるまいと、隠し包みし甲斐もなう、御存じありしお前こそ藤原の淡海様」

と言ふ口

ちやくと袂に覆ひ

「女なれども敵方に、わが名を知れば一大事。不憫なれども助け難し」

「オ、成程お道理ご尤も。生きてゐる程思ひの種、お手に掛かるがせめての本望。かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残る。サ、サア殺して下さんせ」

と刃を待つたる覚悟の合掌

「ムウ、心底見えた。がまこと夫婦となりたくば、一つの功を立てられよ」

「一つの功を立てよとはえ」

「ホ、オ、入鹿が盗み取つたるこそ、三種の神器のその一つ十握の御剣。奪ひ返して渡されなば、望みの通り二世の契約。得心なければ叶はぬ縁」

「ア、是非もなや。悪人にもせよ兄上の目を掠むるは恩知らず、とあつてお望み叶へねば、夫婦と思ふ義理立たず。恩にも恋は代えられず、恋にも恩は捨てられぬ。二つの道に生まれし、この身はいかなる報いぞ」と忍び嘆いておはせしが

「オ、さうぢや。親にもせよ兄にもせよ、わが恋人のためといひ、第一は天子のため。命に掛けてしおほせませう」

「オ、出かされたり。シテ又知らせの合図はなんと」

と見遣る先より

お端女が、被ぎ眉深にしやなくと、豆腐箱提げ歩み来る

「申し／＼」

と呼び掛くれば

『オツ』と呑み込む早合点

「オ、お清所を尋ねるなら、そこをこちらへかう廻つて、そつちやの方をあちらへ取り、あちらの方をそちらへ取り、右の方へ這入つて左の方を真直ぐに、脇目もふらず滅多矢鱈にずゞずゞずつと行きや」

「イエ／＼私が尋ねるのは、そのお清殿とやらではござんせぬ。年の頃は二十三、四で、色白にくつきりとした好い男は参りませなんだかえ」

「オ、来たげなく。それはお姫様の恋男ぢやげなの。三輪の里から後追つて来たところを、なにがお局達が引捕へ、有無を言はず御寝所へ、ぐつと押し込み上

から蒲団を被せ掛け、ア、宵の中内証の御祝言がある筈と暮れぬ内から騒いでぢや。エ、けなり。こことまで内太股がぶき／＼と、卯月あたりの弾け豆。ア、豆腐の御用が急ぐに」

と喋り廻つて出で、行く

## 金殿の段

れてぞ忍ばるゝ

迷ひはぐれし片鶉、草の靡くをしるべにて、いきせきお三輪は走り入り

「エ、この芋環の糸めが切れくさつたばつかりで、道からとんと見失うた。さりながらこゝより外に家はなし。大方この内へ這入つたに違ひはない。エ、誰ぞ来よかし、問ひたや」

「サアくく、ひよんな事が出来て来た。ほんに  
く油断も隙もなるこつちやない。大それた人の男を  
盗みくさつて、何ぢや、いしこらしい内祝言ぢや。モ  
余りな踏み付け様。オ、よいく、その代り何処に居  
ようと尋ね出し、求馬さんと手を引いて、これ見よが  
しに往んで退けるが腹癒せぢや」  
と行かんとせしが

「イヤくく、はしたない者ぢやとひよつと愛想を  
尽かされたら、ムウ、と言うてこの儘に、見捨て、こ  
れがどう去なれう。ア、どうせうぞ」  
と心も空、登る階、長廊下

「つひし見馴れぬ女子ぢやが、そなたはマア誰ぢや、  
何者ぢや」

「ハイ、ハイく、私は内方、オ、それよ、先のお清  
殿とは寺友達。奉公に出られてから、久しう逢はぬ懐  
かしき。ちよつと見舞ひに寄りましたら、これはマア  
くよう来た、上がれ、茶々呑め、さうして煙草呑め。  
アノお上には、あた滅相な御祝言があると聞けば聞く  
程涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢやげな。ほんに  
内方の様な良い衆の御祝言は、どの様なものぢや。お  
のれやれ拜んでなりと腹癒よと、うかくこゝまで参

ア、コレ酒がこぼれるわいの、不調法な。サアこれか  
らが乱酒諷ひ物。これも嗜みなければならぬ。サア、  
四海波なと諷やいの」

「エ、」  
「エ、とは嫌か。そんなら智様拜ます事はマアならぬ。  
サアそれが嫌なら早う諷や」  
とせつき立てられ

「これがマア、何と千秋万歳の」  
千箱の玉の血の涙、声詰らせて泣いぢやくり  
「オ、めでたう哀れに出来ました。サア色直しにはん  
なりと、梅が枝でも露組でも、サアく聞きたい」  
「所望ぢやく」

「エ、あれもない事仰りませ。山家育ちの薮鶯、  
ほう法華経も片言ばかり。上り下りの仇口や、馬子の  
唄なら聞いてもゐよう。もう何事もお赦しなされ。早  
うその智様に」

「サア、智様が見たくば早う諷や」  
「馬子の歌なら面白からう」  
「ついでに振りも立つてしや」  
「嫌ならこつちもなりませぬ、帰りやく」  
と引き出され

りました。どうぞお前方のお心で、智様をちよつと拝  
ましてもらうたら、忝なうござりまする」

と言ふ顔も、恨み色なる紫の  
所縁の女と早や悟り、なぶつてやると目引き袖引き

「マアくそちは仕合せな。かういふ折に参り合ひ、  
お座敷拜むといふ事は、女子の身では手柄者。したが  
こちらが呑み込んで、お座敷へは出すもの、ア、な  
んぞさゝずばなるまい。何と皆さん、いつそのことこ  
の者に酌取らそではあるまいか」

「オ、よからうく」  
「ア、申し、その酌とやらは」

「オ、何の又、そち達が知つてよいものか。今こゝで  
教へてやる。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。あり合ひ  
の智君様には紅葉の局、梅の局は嫁君役、残りは介添  
へ待ち女郎」

と桜の局が指図して  
嫌がるお三輪に長柄の銚子、持たせ  
持ち添へ

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度注いで、左へ二足、  
コレ立つのぢやわいの、立つのぢやわいの。エ、何ぢ  
やいの。うかくせずとよう覚や。二度目注いで智君、

「サアくく、何の嫌と申しませう」

「サ、そんなら諷や」  
「アイ、アイ、諷ひまする」

と泣くくも、涙に絞る振袖は、鞭よ手綱よ立ち上り  
「竹にサア雀はナア、品よくとまるな。とめてサア、  
とまらぬナア、色の道かいナア、ア、ヨ。エ、こゝな  
ほつつ腹め、とこの様に申しまする」  
と打ち伏せば

皆々一度に手を打つて  
「さてもきつい嗜み事、よい慰みで我々がほつつ腹ま  
でよれました。馬士殿大儀」  
と言ひ捨て、行くを

驚き  
「コレ申し、私も共に」  
と取り縋れど

振り放されては  
がはと駆け、寝ながら裾にしがみ付き、引き摺られて声  
を上げ

「ノウ皆さん、お情けない。どうぞ私も御一緒に、連  
れてござつて下さりませ。お慈悲、お慈悲」  
と手を合はせ、拝み廻るを

叩きのけ

「オ、しつこ。とても及ばぬ恋争ひ、お姫様と張り合ふとは叶はぬ事ぢや、フン置いてたも。大胆女の躰をせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐるやら、爪つゝ叩いつ突き倒し

「サア、これで姫様の愠気の名代納つた」

「いよくめでたい御祝言。三国一ぢや賀取り済ました。しやんく、しやんと済んだ」

と打ち笑ひ、局々へ入る後は

前後正体泣き倒れ、暫し消え入りあたりしが

「エ、胴欲ぢや、くくくく、胴欲ぢやわいなあ。

男は取られその上に、またこの様に恥かゝされ、何と堪えて居られうぞ。思へばくつれない男、憎いはこの家の女めに、見かへられたが口惜しい」

と袖も袂も喰ひ裂きく、乱れ心の乱れ髪、口に喰ひしめ身を震はせ

「チエ妬ましや、腹立ちや。おのれおめく寝さゝうか」

と姿心も荒々しく駆け行く向ふに以前の使者

「オそなたも邪魔しに出たのぢやな。もうかうなつたら誰が出ても、構はぬくそこ退きや」

と袖すり抜けて駆け入る裾しつかと踏まへ

「コリヤ待て女」

「イヤ待たぬ。こ、放しや、放しや」

と身をもがく、髻掴んで氷の刃、脇腹ぐつと差し通せば

うんとものつけに倒れ伏す

刀は突き捨て刃りを窺ひ目を配る

奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなる

お三輪はむつくと起き返り

「ムウ、さては姫が言ひ付けぢやな。エ、酷たらしい。恨みはこちからあるものを、かへつてそちから殺さずる、心は鬼か蛇かいやい。オ、殺さば殺せ一念の、生き変はり死に変はり、付き纏うてこの恨み、晴らさいでおかうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨み詰めたる眼尻も、叫ぶ声音も上がれて、さもいまはしきその有様

じろりと見やり

「女悦べ、それでこそ天晴れ高家の北の方、命捨てた

る故により、汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿を亡す術の一つ。ホ、ウ出かいいたなあ」

「なんと賤しいこの身を北の方とはえ」

「ホ、そちが語らひ申せし方は、忝なくも中臣の長男淡海公」

「エ、シテまた私が死ぬるのが、いとしいお方の手柄になつて、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ム、ハ、ハ、ハ、その訳語らん、よつく聞け。彼が父たる蘇我の蝦夷子、齢傾く頃までも一子なきを憂へ、

時の博士に占はせ、白き牝鹿の生血を取り、母に与へしその印。健かなる男子出生、鹿の生血胎内に入る

を以て入鹿と名付く。さるによつて、彼奴が心をとらかすには、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女の生血、これを混じてこの笛に濯ぎ掛けて調ぶる時は、実に秋鹿の妻恋ふ如く、自然と鹿の性質頭はれ、色音を感じて正体なし。その虚を計つて宝剣を過ち無く奪ひ返さん鎌足公の御計略、物陰より窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不憫ながらも手に掛けし」

と件の笛の六穴に、たばしる血汐受け濯ぎ受け濯ぎ

「今こそ揃ふこの幻術、この笛こそは入鹿を挫ぐ火串ならん。ハ、ハ、ありがたや」

と押し戴き、勇み立つたるその骨柄、実に藤原の御内にて金輪五郎即国と鍛へに鍛へし忠臣なり

「ノウ冥加なや、勿体なや。いかなる縁で賤の女がさうしたお方と暫しでも、枕交した身の果報。あなたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝ない。とは言ふものゝ今一度、どうぞお顔が拝みたい。たとへこの世は縁薄くと、未来は添うて給はれ」

と這ひ廻る手に芋環の

「この主様には逢はれぬか。どうぞ尋ねて求馬さん、もう目が見えぬ。懐かしい、恋しくく」

と言ひ死に、思ひの玉の糸切れし、芋環塚と今の世まで、鳴り響きたる横笛堂の因縁かくと哀れなり

今国不憫いや増しに

「せめて葬り得させん」

と背にお三輪が亡骸を

追々馳せ来る荒し子共

「曲者やらぬ」

と追取り巻き

「ヤア手取りにせよ」

とどつと寄る  
当るを幸ひ砂石の如く放り飛ばされ

逃げ行く奴ばら余さじと、奥深くこそ追うて行く

## 入鹿誅伐の段

行く先の

御殿々々に銀燭を掲ぐる戸帳綾錦、紅葉の殿の御簾巻  
き上げ、妹姫の今様を遊覧せんと入鹿大匠

橘姫は今宵こそよき折烏帽子水干の、衣紋も派手の舞の  
袖

檜垣の蔭より淡海公、弓矢つがうて忍び寄り、目当は入  
鹿が胸先へ、羽響き高く切つて放す

苦もなく掴んで大音声

「ヤア宿直はなきか、早や参れ」

「承る」

と弥藤次

玄蕃

走りかゝつて打ちかくる

「心得たり」

と切り結ぶ

姫は宝剣振袖に押し隠す間も

駆け来る入鹿

遁れぬところと橘姫、宝剣下へ投げ捨つれば

取り得る淡海

支へる兩人

打ち合ひく挑み行く

「オ、さぞお腹が立ちませう。そのお怒りをさせます  
も、皆自らが徒らから。赦して給はれ兄上」

と嘆き詫ぶるを

はつたと蹴やり

「鉛刀に等しきなまくら物。事々しく据え置きしは、

剣を餌に天皇始め、鎌足親子もおびき寄せ、皆殺しに  
するこの計略。誠の剣を易々と、彼奴ら如きに奪はれ  
んや」

「エ、すりや今の剣は偽りとな」

「オ、わが帯せしこそ十握の剣」

「エ、エ、さては」

と立ち寄る肩先を

抜く手も見せず丁ど切り

折から吹き出す笛の音に

聞き入る入鹿は酔へるが如く、勇氣砕けてかつぱと伏せ  
ば

不思議や剣は拳を離れ、忽ち化したる龍の形、雲にう

ねり雨を誘ひ、さつと飛び入る御溝の水

橘姫は手疵も忘れ

「オ、それよ、怪しと思ふ心より、龍とも蛇とも見ゆ  
れども、正しき十握の御剣ならずや。たとへ誠の悪龍  
なりとも、何か恐れん夫のため、腮に掛かり死ぬる

とも厭はぬく。再び元の宝剣と頭はれ給へ」

と心願し、ひらりと飛び込む水煙、浪間を分くれれば続い

て分け、命限りと追ひ廻せば

又も虚空に立ち登る、足も空なる雲行きを

目当にこそは、慕ひ行く

次第に更くる夜風に、つれて聞こゆる人馬の音、貝鐘太

鼓乱調に、打ち立てく関の声

官軍随へ鎌足公

玄上太郎御供にて、悠々然と入り給へば

二人の敵を討ち止めて、立ち出づる淡海公

金輪の五郎詞を揃へ

「入鹿が有様稀代のこの笛。しかし十握の御剣の儀は」

「ホ、氣遣ひ致すな。最早わが手に入りたるぞよ。サ

その子細は、兼てより徒党を集むる談山、絶頂によ

ち登れば、黒雲俄に覆ひ掛かり、一つの金龍わが袖に

落つるや否や、十握の御剣と頭はれます。今よりはか

の山を龍ヶ岳と名付くべし」

と仰せも高き多武の峯、この大臣の霊岳なり

玄上太郎進み出で

「ヤアく入鹿、王位を犯す天罰の、只今帰すると知

らざるや。見参やつ」

と呼ばつたり

眠り伏したる両眼を、くわつと見開き唸り声

「ヤア事々しや鎌足、われに刃向はんなどとは、鶏

卵を以て岩石に当たらんとするより危き巧み。目に物

見せてくれんず」

と遙かの楼より飛び下りたり

玄上太郎

金輪の五郎、双方より打ち掛くるを

ちつともひるまぬ勇猛力、鎌足目掛け飛び掛かるを

騒がず神鏡手に捧げ、入鹿が頭に指し向け給へば

鏡に映る降魔の相、和光の煌めき眼も眩み、勢ひ絶え

てたぢくく

鎌足後につくと寄り、神通稀代の焼鎌に、水もたまらず

掻き切つたる

首はその儘虚空に上り、火焰をくわつと吐き掛けく、

飛鳥の如く駆け廻る、一念の程ぞ恐ろしき

淡海きつと見、口に唱ふる重<sup>じゆう</sup>獸<sup>じゆう</sup>品<sup>ほん</sup>、忽ち治まる朝敵の、  
繁木が本を打ち払ふ、鎌足の徳劍の徳、誠を照らす神鏡  
は、神の御影の尊くも、思へば伊勢とお三輪が菩提、賤  
の苦環<sup>くわん</sup>繰<sup>くり</sup>言<sup>こと</sup>を、繰り返したる言の葉を、末に伝えし物語、  
ゆるがぬ御代を祝しける